

編部道報省軍陸

# 年四戰聖

步巨の設建亞東新

Proj. No.	
S. A. No.	10083
Sack No.	1
Item No.	14

#2930



TWT 517 1

社聞新日每 社聞新日 京東



# 聖戰四年



陸軍省報道部編

發行所  
東京日日新聞社  
大阪每日新聞社

IMT 517

2



## 聖戰四年 目次

幕進こゝに四年！……………	五
事變とわが國力の増大……………	二六
事變を繞る國際情勢……………	四四
事變の本質……………	六二
國防國家體制の建設……………	八〇
結語……………	九四
〔附 録〕	
支那事變經過日誌……………	九七



支那事變が勃發してこゝに滿四年を迎へる。思へば五年以前の七月七日、盧溝橋畔に響きわたつた一發の銃聲こそ、新秩序建設のスタートを切つた號砲であると同時に、舊秩序の崩壊を告げる弔鐘でもあつた。

事變當初は不擴大、局地解決といふ方針の下に、能ふ限り戦火の波及を限定することに努力が續けられたのであつたが、暴戾な蔣介石軍の挑戦によつて事態は悪化の一途をたどり、遂に全面戦争の状態に立至つた。重慶政権が英米の摩手にあやつられて抗戦を續け、あくまで日本に刃向つてくる限り、事態は必然的に長期戦の體制とな

り、双方が四つに組んで争ふといふ形にならざるを得なかつた。まだちつとやそつとで解決することは困難といはねばならない。しかしながら過去四ヶ年における事變の推移を見るに、そこには大いなる成果があげられてゐることは、見逃すことの出来な事實である。即ち聖戰四年、この間、皇軍は御稜威の下、赫々たる武勳を示し、文字どほりの連戦連勝によつていはゆる『支那中原』の大部分を席卷し、敵を山間僻地に壓迫して、南北實に四千六百キロ、わが國土の二倍半を超ゆる廣大なる占據地域を手中に收めた。しかもこの地域においては汪精衛氏を首班とする國民政府を中心として、政治的にも、經濟的にも、思想的にも、文化的にも、輝やかしき幾多の建設が行はれつゝあるのである。

國民はやゝもすれば、事變の戦果を占據地帯、遺棄死體、鹵獲兵器などの武力的な、物質的な、有形的な『戦果』のみで考へようとする傾きがあるけれども、皇軍の戦果



は決して物的に計上できるものばかりには限られてゐないのである。近代戦が總力戦である以上、政治戦、経済戦、思想戦、文化戦による戦勝の成果も極めて大なるものがある。かゝる形以上のもの、眼に見えず、一般に知られざる戦果こそ、支那事變による真の大いなる收穫であるといはねばならない。

然らばその見えざる戦利品とは何か？ 支那事變における形以上の收穫とはどんなものか？

### 幕進二、に四年！

支那事變四年間に、日本が得た形以上の收穫とは何か？ それは既に多く語られ、知られてゐるところの表面的な戦果に加へて、第一は敵側に與へた物質的及びそれ以上の大いなる打撃であり、他の一つは政治・経済・思想・文化の各部門における大いなる『建設』の金字塔である。

支那事變の特質は、一方に武力戦による舊秩序の破壊があると同時に、一方においては新秩序の建設といふ巨大なる努力が戦ひ築かれつゝあることにある。

皇軍は戦ひつゝ建設し來つた！

武力戦が赫々たる勝利を得たと共に、一方では輝やかしき幾多の建設戦が遂行され



つゝあるのである。われ／＼はその事變による『破壊面』よりも『建設面』を、より以上に高く認識しなければならぬ。

支那事變によつて重慶政權に與へた最大の打撃

蔣進四年！ 戦へば必ず勝ち、追へば必ず破つた皇軍の偉大なる武力によつて、敗走また敗走を續けてゐる蔣介石軍が、今や最後の段階に喘ぎつゝあることはいふまでもない。しかし重慶は果してどの程度に弱つてゐるのであらうか？——これを最も判り易いやうに歴史的・軍事的見地から、敵軍の活動を期年的に説明して見れば、よりハッキリしよう。

第一年——積極的挑戦期 盧溝橋事件から上海戦闘を経て南京陥落に至るまでの作戦初期においては、敵軍は日本の軍事的・政治的の實力を過小評價し、いはゆる『侮

日感』を以て我を輕侮して事毎に挑戦し、戦意も亦旺盛で、北京・天津・上海などで見られたやうに、自主的・積極的に行動して來た。

第二年——武力再編成期 しかし南京陥落から徐州會戦を経て、廣東陥落・武漢攻略に至る前後は、敵は日本の決意と實力に驚きながらも、何とかして頽勢を挽回せんと腐心し、國共合作・武力再編によつていはゆる『奥地吸引・磁鐵作戰』を豪語し、英米の援助によつて日本の經濟的疲弊を待たんと畫策してゐた。

第三年——積極的反抗期 さらに武漢陥落から南昌陥落を経て冬季攻勢までの期間には、敵は連敗の事實を何とか胡麻化さんとして昭和十四年四月の春季攻勢を初めとし、夏季攻勢、九月攻勢、冬季攻勢と數回にわたつて全線にわたる反撃を行つて來たのであつたが、悉くわが武威の前に失敗を重ねた。

第四年——消極的抗戦期 かくて昭和十五年に入つてからは、初頭の冬季攻勢が挫



折してより現在に至るまで、最大の特徴として一回も全面的な反撃を見せず、僅かに三月の蒙疆、八月の北支における共産軍の蠢動があつたに過ぎない。殊に蔣介石が昨年十一月の遊撃攻勢命令に續いて、十二月には正月攻勢の號令を發したにも拘はらず、各戦區ともに極めて低調であり、活潑なる反撃行動は全く見られなかつたのである。

敵軍第一線の戦意は如何に衰へてゐるか？

最近 いろいろの情報を綜合して見ると、蔣介石軍の戦力は極めて低下してをり、過去四年を通じてみて一番疲弊状態にあるものゝやうである。

詳細な數字をあげることは省略して置くが、最近における各戦區において、敵の交戦兵力に比べて遺棄死體の數が減少したのと逆比例して、俘虜・歸順投降の數が少

ンと激増してゐる事實は、敵の第一線將兵が今やすつかり戦意を失ひ、徹底抗戦の氣力に缺けて來たことを如實に物語るものであらう。

上海戦闘の頃、執拗な抵抗力を示し、目撃した一フランス將校をして「支那軍の防禦力は世界一だ」と讃嘆せしめたほどの當時と比較して、何といふ變化であらうか。

徐州會戦においては、自らトーチカの中に足を縛りつけて抗戦した少年兵すらあつたといふ。南京・武漢の前後と比べても、投降指數は四倍半以上に達してゐるのである。

同時に交戦兵力に對する鹵獲兵器・彈藥の割合が非常に貧弱となつたことは、敵軍の裝備が劣悪化したことを實證するものである。

再三の整訓（整備・訓練）によつて依然、兵力は二百萬と呼號してゐるが、その實際の戦力は従前の半ばにも達してゐないものと思はれる。敵側は三百七十個師を編成



せりと豪語してゐるが、一個師の實力は従前の七割に充たず、小銃、重機の配備も過去の八割にも達してゐないやうだ。殊に火砲の不足は甚だしく、重砲・野砲・山砲の如きはいふまでもなく、歩兵砲なども、蔣介石直系の若干を除いては全く配属されず、迫撃砲を完備した部隊も稀にしか見られないといふ状態である。

殊に空軍の戦力低下は最も甚だしいものがあり、數十次のわが重慶空襲に對しても殆んど出撃するものがなく、残存約二百機以下は成都方面に退避して、努めて決戦を避け、専ら國內宣傳用に供されてゐるに過ぎない有様である。

これに比べて交戦國の國民でありながら、未だに一度も空襲らしき空襲を知らずに済む日本國民は、ヨーロッパの交戦國民に比して幸福すぎるほどの幸福であるといへよう。ドイツがあれだけ絶対優勢の空軍と、壓倒的な電撃戦の勝利を續けながらも、なほイギリス空軍の反撃を完封し得ず、ベルリンはしばしば爆弾の下に苦しまねばならぬ。

ならぬ有様であり、ロンドンに至つては戦火の慘劇はむしろ第一線以上のものがある。

この幸福に狙れて、もし、砲弾下にある國民としての決意を忘れるやうなことがあつたら、それは寒心の極みである。

**重慶の物資不足と世界第一の高物價**

重慶側の受けた打撃は、さうした武力的なものに止まらない。殊に經濟上の窮迫はかなり甚だしく、また國共摩擦等に見る政治的影響も頗る大なるものがある。

最近重慶を脱出してＱ〇に逃げ來つた重慶政權の主要職員の一人が告白したところによると、重慶の物資難はわれ／＼の想像に絶するものがあり、昨年夏の佛印・ビルマ兩援蔣路の中斷以來、わが空軍の連爆と、それに續く佛印進駐、南支輸血路遮斷な



どの新作戦により、まさに世界一ともいふべき高物價を示してゐるといふ。

一例をあげるならば、生活必需の米一擔（二石五斗）が二百元から五百元に暴騰、豚肉一斤三元、麻油一斤二元五十、日用品のマツチ一箱が五十仙、右鹼一個二元、靴下一足八元、シャツ一枚三十五元もする。それも殆んど一般民衆の手には入らず、甚だしい例では、ウイスキー一本三百元、ビール一本五十元、外國タバコ一箱（十本）二十五元、ルビークイン（支那製二十本）十二元といふ殺人的なインフレだといふ。

蒋介石はこの物資難に對處するために、一千萬元を投じて『平價購鎖處』を設立、日用品必需品の入手に狂奔してゐるが、相次ぐ新作戦によつて密輸路は粉碎され、事實上物資はますます缺乏する一方なので、つひに重慶市民を強制退避せしめるに至つた。外國通信記者の報道によれば

『現在では重慶市街には軍隊・強制徵募の苦力、そして奥地へ逃げる旅費すらない貧

民のみが、飢ゑさらばへた群を見せでゐるだけである。白人の文化水準では到底安住し得る土地ではない』

と痛烈に暴露してゐるのである。

南京の國民政府はかく成長しつゝあり

かく重慶政權が壊滅の一途を辿り苦悶に喘いでゐるのに反して、南京政府が輝かしい未來性を以て希望と建設の地歩を固めつゝあることは、事變の最も有意義な一つの成果であると斷言して差支へない。

重慶政權が反抗する限り、あくまで壓倒撃滅の手をゆるめず追求粉碎せざるを得ないが、その蒋介石と反對の立場に立つ南京政府の側からいへば、支那事變解決は、すでにその第一歩を踏み出したと考へることが出来るのである。極端にいふならば、南



京政府に關する限りでは、事變の凡ての動因は、すでに除去されたときへいへるのである。

一、そも／＼支那事變は、日支兩國の對立激化が重要な原因の一つであつた。

日支兩國の政策が食ひちがひ、支那は日本の進展を喜ばず。日本の平和的大陸進出を侵略と誤解し、殊に滿洲國の獨立と日本がこれを支持し承認したことが、痛く中國側の政府・國民を刺戟し殊に敵性國家の煽動によつて、理由なき抗日反日に驅り立てられる結果となつたのであつた。

事變勃發以來皇軍武力の推進によつて、北支に臨時政府、中支に維新政府が生れ、皇軍と協力、その支援によつて民心の安定、戰禍の復興、資源の開発が行はれて來た。それが更に汪精衛氏を首班とする和平運動の展開によつて大同團結し、昭和十五年三月三十日、國民政府として南京に改組、遷都したのであつた。

そして舊來の抗日容共政策が一擲され、親日和平・善隣友好・共同防共・經濟合作を原則とする全面的な日支共榮を旗じるしとして、日本と共通の目標に向ひ、共に提携して新東亞の建設に邁進することになつたのである。而して昨年十一月三十日、日支國交調整條約の調印によつて日本はこれを正式承認し、同時に日滿華三國共同宣言によつて滿洲國、中華民國新政府は相互に承認しあつたのであつた。

かくて南京政府に關する限り、事變勃發の政治的原因は完全に清算されたわけである。日本と國民政府との關係はもはや以前の對立と衝突ではなくて、共存と共榮のために手を握り力を協せることになつたのである。かうした過去四年の政治的建設は極めて顯著なるものがあり、偉大なる躍進を遂げたものと云はねばならない。

經濟建設の驚くべき進展ぶり



次に事變の重大なる原因の一つとして考へられることは、日支兩國が經濟面においても對立してゐたといふ點である。換言するならば、日本と中國の大陸における利害が正面衝突し、中國は日本の正當なる進出を眞向から反對し續け、北支はもとより中支・揚子江沿岸に血と汗で築き上げた日本の經濟地盤は逐次後退を餘儀なくされ、英ポンド貨を頼みとした法幣によつて日貨排斥が公然と行はれ、豊富な資源は悉く日本産業の前に門戸を閉してしまつたのである。

しかるに、事變後の幕進四年、經濟建設の跡を振り返つて見れば、既に北支開發會社、中支振興會社の設立があり、この二つの國策會社を中心とする開發事業は着々と進み、航空、航海、船舶、鐵道、通信、電氣などの重要事業、鑛山、鹽業、紡績などの重要生産が殆んど全て日支の合辦、合作によつて運営せられ、法幣は新しく圓系通貨とリンクされて、東洋經濟圏の一角がこゝに確立されるに至つてゐる。

これを事變以前の日支經濟が對立激化してゐた當時と比較すれば、正に隔世の感がある。

文化・思想に於ても百八十度の轉換

更に事變の有力なる原因の一つとしてあげねばならないことは、日支兩國の思想・輿論の對立、國民感情の激突といふ問題である。事變勃發の以前から、支那側のあらゆる言論機關・教育機關・文化機關は擧つて日本を誹謗し、つねに反日を以て目標としてゐた。殊に事變が始つてから後のデマと反抗は一段と物凄なものがあつた。そして過去四年、一方に於て武力戦が展開されると同時に、思想・文化の上においてもつねに激烈なる戦ひが繰返へされて來たのである。

けれども皇軍の武力が推進されるに伴つて、思想・文化の部面にも著しき變化が



齎らされてきた。現在においては、重慶側と上海・香港などの敵性租界内に残存する若干の抗日分子を除けば、軍占領地域内——即ち南京政府の治下における言論機關・教育機關・文化機關は悉く親日一色に塗り換へられてしまつたのである。

排日を主義とし來つた大學・學校においては、百八十度の轉換を示して日支提携が説かれるやうになり、新聞・雑誌も、映畫・演劇も、抗日反日から和平親日へと一變しつゝある。映畫の如きは日華合辦の製作會社が設立され、撮影も配給も日華合作で行はれてをり、演劇においても過日來朝した劇團を始め、逐次汪精衛氏を護り蔣介石を撃つために協力・宣傳するやうになつて來てゐる。

軍事・政治に最も關係の深い放送の如きは、蔣介石軍が退却に當つて悉く破壊し去つた後を、日本軍の手によつて修復、再建され、最近においては北支・中支に日華合辦の放送協會が設立されるに至つてゐる。

思想戰・文化戰においても、國民政府治下の機關が過去の對立から今日の提携にと變化してきたことは、これまた隔世の感が深いのである。

日本が得た最大の利得は何？

以上のやうに政治・經濟・思想・文化の方面だけを取り上げて見ても、事變前の險惡なる對立は著しく緩和され、四年前には想像もつかなかつたやうな新しい建設が大陸に打樹てられんとしてゐるのである。

しかしながら、事變によつて日本が得たところの利益には、これらの建設面における大戦果にもまして、更に莫大なものがもう一つあつた。それは事變によつて、日本の中國に對する認識、支那の日本に對する理解が、躍進的にレベルを高めたことである。この無形の利得は何ものにもまして尊いものであらう。



元來、日本と中國とは決して相争ふべきではなく、相援けて進まねばならない友邦なのである。それがお互に理解し合はなかつたところに『東洋の悲劇』があつた。恐らく蒋介石側においても、今にして、日本の實力を知らず國力を誤算してかゝつたことを後悔してゐるであらう。日支兩國は、相互の無理解のためにこそ、今日の悲劇を生んでゐるのである。

聖戰四年、數百萬のわが青壯年中堅男子が大陸に渡つて、直接支那人と觸れ、その風物に接して得たところの收穫こそ、何物にも代へ難い貴重なものである。これこそ形にあらはれない、忘れてはならない大成果の一つである。わが中堅たる男子數百萬が自ら體得した大陸の經驗と知識こそ、支那を援け、東亞の盟主として、大東亞共榮圈を建設して行く上に、どれ程の力となるかしのれない。これこそ、まさに測るべからざる『戰果』といはねばならない。

もし事變なかりせば？

更に、もし支那事變がなかつたならば？……と考へてみると、事變によつて齎らされた効果は、まだ多くの方面に發見される。

事變がなく、日本の威力を發揮する機會が與へられなかつたなら、第一、今日の世界變動期に際して、今頃日本は世界の片隅にたゞ小さくなつて縮んでゐるより外はなかつたかも知れないのである。

支那事變によつて未退轉の決意と斷乎たる實力を世界に示したことによつて、日本が獲得した地位は大いなるものがある。支那大陸に赫赫たる武勳を示したればこそ、佛印への和平進駐も行へたのであるし、また南方問題に對しても發言の機會が與へられたのではないか！ かのタイ・佛印の調停が成功したのも、事變の勝利によつてわ



二二  
が國の國際的地位が確固たるものとなつてゐたからこそ、初めて行ひ得たのだと云ひ得る。

もし支那事變以前の状態で現在まで来てゐたとすれば、支那沿岸の空軍基地と海軍根據地はそのまゝ、敵性第三國に利用され、現在のわが大陸封鎖とは全く反對の逆封鎖を受け、或ひは空爆の下に晒されてゐたかも知れないのである。少なくとも現在にあつては支那大陸に關する限り、敵性空軍は行動半徑以内に基地を獲得し得られず、またわが封鎖圏内に自ら守るに足る海軍根據地をも利用し得ないのである。この儼然たる事實がなかつたならば、對日攻勢を夢想する敵性國家は、日本與し易しとして、或は戰爭手段に訴へてゐたかも知れないのである。

いや敵性第三國を待つまでもなく、銳意空軍を擴大し海軍を充實して戰備に努めてゐた蔣介石軍によつて、更に大なる打撃を蒙つてゐなかつたとは誰しも斷言し得ない

ところである。

日本はどうして國防國家にめざめたか？

更に問題なのは、支那事變によつて始めて日本が本來の使命に立ち還りつゝある事實である。自由主義の風潮が氾濫し、個人主義の思想が深くはびこつてゐた四年以前のまゝであつたなら、日本は絶対に今日に見られるやうな國力と、舉國一致の體制を建設することは出来なかつたであらう。

戰爭といふ大きな事實に直面して、日本國民は始めて眼覺めたのではなかつたか。もし、支那事變の勃發も見ず、歪められた偽裝平和の下に日本がずつと儉安の夢を貧り續けてゐたならば、到底、今日に見るが如き國防國家體制の建設も着手されてはゐなかつたに違ひない。



事變直前の國民はどうであつたか、一部の先覺者が聲を大にして叫んで來たにも拘はらず、世界情勢の動きも見極めず、徒らに英米の實力に迎合し、これに依存することによつてのみ、日本の安逸を求めてゐたのである。もとより強力軍備も眼中になく、高度國防さへ無視されて來たかの觀があつた。

今は違ふ。

少なくとも、事變四年の大陸における勝利に加へて、日本自身の國力にも偉大な進

日本の國力は飛躍的に伸長してゐる！

化がなされたことを知らねばならない。國民は支那事變によつて日本の國力が消耗し、資源が消費されて來たのではないか、と考へる者が多いやうであるが、實際は斷して違ふのである。日本は事變によつて、

國力を増大こそしてをれ、決して滅殺されてはゐないことを知らねばならない。

日露戦争の頃は、僅か一年半の戦ひで、豫備兵から後備兵まで順次に召集せられ、戦争の終り頃にはだん／＼戦地に年寄が多くなり、若き兵の姿は見られなくなつて心細い限りであつたといふ。今度の事變で珍らしいことは、當初は相當に老兵も多く、髭武者の親爺が陣中の人氣者となつてゐたこともあるが、作戦の進行と兵に逐次壯年化され、現在の陣中にあつては若い兵が最も多いのである。——これは軍事眼のあるものならば誰しも一驚するに足るところであつて、戦争が永びくに從つて古い豫備兵を順次に歸還させ、召集解除して、交代に若い兵隊を補充したからに外ならない。ドイツ軍は八百萬の大軍を動員して電撃戦の戦利を獲たといはれるが、日本は最小限度の兵力を以て大陸の戦線を確保し來つたのである。必要とあらば、まだより以上の大なる動員が決して不可能ではないだけの餘力ある軍備を有してゐるのである。平



時ならば二十年、三十年を要する戦力を、僅か四年間に蓄積し來つたことは、事變の隠れたる一つの成果として見逃すことの出来ないものである。

物資においてもまた然り。事變以來四ヶ年間、國民が生活の上で多少の不便を忍んで來た犠牲は、今や大いなる國力の蓄積となつて、國防を充實せしめつゝある。戦争によつて消耗されたものは極く僅かな一部分に過ぎない。消費量以上に生産力は擴充し、國防力に蓄積されてゐるのである。

そして國防國家體制は建設の第一歩を踏み出した。日本は支那事變に對處し、その解決に邁進すると共に、如何なる最悪の場合に立至つてもこれを突破し、世界變動期を乗切り、大東亞共榮圏の建設をなすに必要な實力を蓄へつゝあるのである。

もとより戦時下、なほ作戦遂行中の今日である。國防力に關する發表は許されないが、國民はイザとなれば斷乎として制勝する陸海軍に信頼して可なり！である。

たゞ敢て云ふ！日本の理想は更に大であり、前途は遼遠なものがある。現在までの成果では十分でない。目前の小成に安んじてはならないのである。

大東亞共榮圏を確立し、これを背負つて邁進するためには、襲ひ來ることあるべき凡ゆる妨害を、われらの手で排除し、斷乎として世界動亂の渦中を乗切るだけの、不動の信念と必勝の實力を持たねばならぬ。

勝つために、

勝ち抜くために、

日本はあくまでも強くあらねばならない。



## 事變とわが國力の増大

二八

既に述べた通り、われわれは今度の事變によつて幾多の赫赫たる成果を擧げることが出来た。しかし、或ひはこゝに疑問を抱くものがあるかも知れない。このやうに莫大な成果があるにも拘らず、何故吾々の生活は日毎に窮迫さを加へて行くであらうか、曾つて經驗したことの無いやうな生活上の不便が殖えてゆくのは何故なのであらうか、と。

これに對して大抵の人は、今やわれわれは何百億といふ戦費を費ひ、四千六百キロといふ未曾有の一大戦線に亘つて消耗戦を行つてゐるのだから、物の足りなくなるのは當然ではないか、と答へるに違ひない。成る程一應は尤もである。が、それでは消耗戦を行はんがためにのみわれわれは物の不足を忍ばねばならないのであらうか。

### 戦争は果して消耗戦か

消耗戦といふ言葉をしばしば耳にするが、單なる消耗戦といふものが、特に近代戦に於て、存するものだらうか。

消耗戦を云々する人々は、大抵次のやうな論理を樹てる。今假りに大砲の彈丸百發を製造するのに一萬圓要するとし、工作機械一臺を要する費用も一萬圓だとする。兩方とも同じ費用を要した品物である點に於ては相違がない。ところが、その實用價値に於ては、大砲の彈丸は一發發射すれば、それで彈丸としての價値はなくなつてしまふが、工作機械は一廻轉させる度に數千圓、數萬圓の富を生み出す。同じ價格の品物でもこれだけ違ふ。即ち砲彈の方は一回きりで生産過程から抜け出してしまふのに反して、工作機械の方は、廻轉の度毎に富を増す。云ひ換へればそれだけ資本の蓄積が

二九



できるわけである。だから再生産過程に入らず、従つて富を蓄積しない軍需品の消費は單なる消耗に終る。このやうな軍需品を無制限に必要とする戦争が、一大消耗戦であることは當然である。従つてこの消耗物資の補給のために民需を犠牲にするのは已むを得ないことで、だからあらゆる物の不足を來して來るのだ、と。

成る程、戦争が消耗を伴ふことは事實であり、近代戦に於けるが如く、機械力が戦争の中心となるに従つて、物資の消耗がますます殖えてゆくことも亦事實である。しかし、それだからといつて戦争が消耗に始つて消耗に終るといふのは速断に失する。消耗戦を云々する論者は、戦争といふ現象のみに囚はれて、戦争によつて生じた結果を無視してゐるのである。而も戦争といふことの中には、當然この戦争によつて生ずる結果をも包含せしめて考へねばならない。戦争による結果とはいふまでもなく『戦果』を指す。かう考へて來れば、戦争は一方に於いて莫大なる消耗を伴ふが、他

方に於いて、この消耗物資を補つて餘りある『戦果』があることを忘れてはならない。勿論、これは戦争に勝つといふことを豫想しての話であるが、皇軍が戦へば必ず勝つと云ふことは今更断るまでもない。

では、今度の事變に於て、どの程度までこの消費を補ふ富の蓄積が出來てゐるか、的確な數字を擧げることが許されないが、大體に於いて次のやうな見當になる。

支那事變によつてどれだけの蓄積が行はれたか

昭和十四年一月の閣議に於て決定した生産力擴充計畫は、昭和十三年度を第一年とする四ヶ年計畫であつて、最終年度たる昭和十六年度に於ては、昭和十三年度の生産額を一とするとき、その増加率中のあるものは十倍、二十倍、三十倍に達するものさへある。



この計畫の實施に當つては無論種々の困難に遭遇した。例へば歐洲戦争よりドイツよりの機械輸入が困難になつたこと、旱害、石炭不足のため動力が不足したこと、外米輸入による外貨資金の減少したことなどがその主なる原因であつたが、大體昨年度に於ては、計畫の八割程度の成績を収めることが出来た。このうち自給自足のできるものは石炭、鐵鑛、輕金屬、自動車等その他枚舉に遑がない。どうしても海外よりの輸入に俟たねばならぬものは數種の非鐵金屬、油、羊毛、棉花等のみである。この他飛躍的増産を遂げたものゝうちに船舶があり、事變以後の増加噸數は約百萬噸臺に達し、これだけを取つてみても、全體としてわが國の富が如何に増大したかを知ることが出来る。

戦争は破壊と同時に建設を行ひ、新しい創造をなすといふことは、從來しばしばいはれて来たことであるが、以上によつて見れば、戦争は消耗であると同時に蓄積をも

行ふ。否消耗以上に蓄積が行はれてゐるのである。もし今度の事變が生じなかつたらば、これだけの生産力の擴充は、到底短時日間には行はれ得なかつたらうし、また上述のやうな物資の自給自足すら、行ひ得なかつたであらう。われわれ個人個人の日常に要する物資は、なるほど窮迫の度を増してゐるには違ひないが、國家全體として見た場合には、これだけの主要物資が増加してゐるのである。われわれが一握の米、一片の炭を節約したことが、積み積つてこれだけの莫大なる富の蓄積を見たのである。

米が足らなくなつたのは事變によるものではない

出来るだけ民需を切下げて軍需に振り向けることは、戦争を遂行しつゝある今日是非とも行はねばならないことであつて、これなくして戦争の指導は萬全を期し難



い。が、人によつては物の足りないのをすべて戦争のためであると片づけてしまふ傾きがあり、やしもするとこの傾向を事實以上に考へる向きがある。たとへば米が足らなくなつたことを、直接出動軍隊が殖えたから、それに要する米が急激に増加し、そのため一般に出廻らなくなつたのだと見る如きがそれである。これは随分皮相な見方であつて、出動部隊に要する米穀は全體の産米から見れば九牛の一毛に過ぎない。而も、出動部隊と云つても、それだけの増加人員が他から入つて来たわけではなく、たと單に日本の壯丁中から召集されたのに過ぎないのだから、米を食ふといふ點から云へば、軍隊に入つても入らなくとも、大差はない筈である。

だから米の需給が窮屈になつたのは、直接戦争に原因があるのではなく、朝鮮の旱害のため朝鮮米の減産を來したことに、これによつて例年朝鮮米に依存してゐた地方がこれに代る飯米を要するやうになつたこと、或ひは一部外地に於いて米穀常用者が激

増したことに、外米の輸入が減少したことなどの、寧ろ戦争以外のことに、主な原因があるのである。

肥料が足りなくなつたのも亦これと同様で、歐洲戦争のため海外よりの輸入が困難になつたり、未曾有の旱害に基く電力不足などによるもので、このやうに少し慎重に考へればすぐ合點のゆくことであるから、よくものゝ真相を把握することが必要で、凡て原因を誇大視して何もかも事變のためのやうに考へることは避けねばならぬ。

それだけではない。今日、軍としてはいはゆる現地自給の見地より、糧秣は勿論のこと、押収した被服・武器・彈薬を初め、馬匹に至るまで、少しでも現地で利用し得るものは悉くこれを利用し、出来るだけ内地の負擔を軽減するやうに努力してゐる。のみならず、また軍は率先して代用品の利用に努め、第一線の將兵で綿製の代用冬服、青年訓練用の地下足袋を使用するものも相當多數に上つてゐるが、その他各種



軍需品に亘り、出来得る限り代用品を活用してゐる。現在ドイツに於て、食糧衣服ともに最も豊富に支給されてゐるのは國防軍であるといはれてゐるが、國民としては、國防の第一線に立つ將兵に對しては、たとひ日常の食糧に不足を來しても、なほ、出来るだけこれを節して、前線に送ることはその責務であらねばならぬ。なる程、われ々の生活は次第に窮屈になつてゐるとはいふものゝ、まだ餘裕があり、日常捨て、厭みないものゝ中にも、工夫次第ではまだ大いに役に立つものが少くない。

**獨逸はかくの如く物資を補給す**

これを歐洲交戰國に於ける物資の補給状態と比較してみよう。獨逸は既にあれだけの赫々たる戦果を収めてゐるにも拘らず、パン、肉類、牛乳、ジャム、砂糖等を初めその他各種の食糧品に對し、それ々々購入切符が發給され、且つ一週間の購入許可

量が嚴重に規定されてゐる。食糧品だけではなく、洋服、シャツなどの衣服、靴その他の皮革類、石鹼に亘つても亦切符制度が實施され、これにも亦一人當りの標準使用量が定められて、それ以上は絶對に賣らぬことになつてゐる。一方現在所持してゐるものは、洋服ならポロ〜になり、靴下なら穴だらけになり、所持品が標準數量以下になるまで新品の購入ができない。その上、新品を購入する時には警察へ出頭して許可を得た後、切符を手にする。手にした衣類は勿論スフであるといふ有様だ。ただ食糧の補給は、最近になつて占領地よりの移入によりよほど潤澤になつた模様である。

**英國の物資困難**

これにも増して食糧不足に悩んでゐるのは英國であつて、ベーコンは統制され、マ



「マレードは殆んど手に入らず、卵は非常に高價なため、これも手が出せず、レモン一個八十錢、玉葱一磅につき約一圓四十錢（レモンと玉葱は統制されたため、市場から姿を消した）もする。その他果實、野菜は海外よりの輸入が困難なため、その出廻りは非常に悪く、英國人の朝食は僅かに雜穀類と代用珈琲によつて済ますといった有様である。その上、肉類の割當は一人當り一週一志乃至一志六斤の間を上下し、その上料理も魚なら魚、肉なら肉、チーズと卵ならチーズと卵といふ風に一種類一皿きりに限られ、魚と肉と二種類以上の料理を攝ることを禁じられてゐる。特に英本國は島國であるため、野菜、果實の大部分はこれを海外植民地より仰がねばならない状態にあるが、獨逸の通商破壊戦によつて船腹が不足し、これを入手するのに少からぬ困難を感じ、乾燥野菜すら十分でなく、僅かに空閑地の耕作によつて辛うじて間に合はせてゐる。

かういふ風に見てくるならば、物費の不足といふことは、戦争を行つてゐる國には多少ともに免かれない現象であつて、獨英兩國に較べれば、わが國の如きはまだまだ餘裕があると云はなければならぬ。

これを資源の點から云つても、わが國の前途は極めて洋々たるものがあり、日滿支を一丸にした互助連環の經濟關係が打立てられるならば、十分に自給自足ができる。世界を相手にして戦つても決して恐れるには當らない。例を滿洲に取らう。一昨年行はれた調査に於てすら、地下埋藏資源は石炭が二百億噸、鐵礦石は三十億噸を下らない。その外の金屬に於いてもアルミニウム、マグネシウム、銅、鉛、亞鉛等その有望なことは何人も疑を抱いてはゐない。滿洲一國でさへこの通りである。これに支那、南洋方面を加へるならば、その寶庫は恐らく想像以上のものがあらう。しかしながらこの埋藏資源を開發し完全なる自給自足體制を確立するには、なほ數十年の



長年月を要するのであつて、資源が埋藏されてゐるといふことだけで樂觀してはならない。これを開發せんがためには十分なる資金と卓抜なる技術を養はねばならない。

#### 物資の窮乏は國防力強化のため

かく考へれば、現在物資の需給が窮乏になり、その不足を招いてゐるといふことも、軍備の充實、生産力の擴充、大陸の建設に當つて、莫大なる物資を必要とするからであり、しかもわれわれが生活の不自由に耐へることによつて、それに數倍、數十倍した蓄積が行はれてゐることを思へば、この苦しい生活も、畢竟は自給自足の經濟を確立し、また國際的危機に處すべき國防力を強化せんがために行はねばならぬことなのである。そして數年或ひは十數年後に於けるわが國力の飛躍的發展を思ふならば、現在の苦しさぐらゐは、寧ろ甘んじて忍ばねばならないのである。

然らばこの生活上の困難は如何にして突破出来るか。現在の未曾有の窮迫時代に當つて、われわれは如何なる心構へを持つて、これに耐へて行くべきであらうか。

これに就いて第一に考へねばならぬことは、われわれはこれまで『生活』といふことをどの程度に眞剣に考へてゐたかといふ點である。われわれが『生活』といふ言葉を使ふ場合、知らず識らずの間に、一定の生活標準といふものを考へてはゐなかつただらうか。特に一部知識人の間で云々される生活文化とか文化生活とかいふ言葉のうちには、極く表面的な上ずつた生活の觀念が滲み込んでゐはしなかつたか。かういふ人々は、今までの安易な生活——それは多分に享樂生活といつた分子を含んでゐるのだが——それに慣れきつて、それを自分の生活標準とし、それ以下に生活程度を切下げ、緊縮することを、何だか生活の文化性を失ふかのやうに考へるのではないか。映畫館や劇場、デパートなどに日參したり、銀座をブラついたたり、酒や珈琲



を飲み、文學や音楽を口にしたりすることのみが、いはゆる生活文化であるならば、生活が苦しくなり、享樂機關が減少すれば、生活の文化性は失はれてゆくわけである。だが眞の意味での生活文化、精神生活といふものは、たとひこれらの娛樂機關がすべてなくなつてしまつても、決して失はれるものではない。否、寧ろ生活が苦しくなればなるほど、そして上ずつた生活が、より眞劍になり、足が地についてくればくれば、その内面生活はますます豊富になるものである。古人が云つたやうに肘を曲げてこれを枕とし、水を飲んでこれを食糧とする生活であつても、樂しみはまたその中にある。生活に徹するとは恐らくこの謂であらう。

これは個人の生活であるが、民族に就いても、同じことが云へる、氣候や風土に恵まれ天然の物資に恵まれてゐる地方の民族は一つとして偉大なものはない。ルーズな生活をしてゐる民族が必ずしも高い民族ではない。灼熱の地印度は釋迦を生み、不毛

のアラビヤ沙漠からキリストが出た。生活標準を如何に切下げようととも、その生活が眞劍である限り、その民族の文化性がそれとともに消滅するものでは斷じてない。

かう考へてみると、生活が苦しいといふのも、今までの生活標準を中心とするから話であつて、生活環境が變るに従つて、この標準はどしく切りかへて行かねばならぬ。一度高まつた生活程度を低めること、一度弛んだ生活を引緊めることは非常に困難なことには相違ないが、これなくしては、わが國力の發展が期し得られないことを思へば、われ／＼は自ら進んでこの困難な生活をやり終せねばならぬ。

『最低の生活、最大の光榮』——これこそ、わが國民生活の標語であらねばならぬ。



## 事變を繞る國際情勢

四四

前章に於て述べたやうに、東亞經濟プロックが成立するならば、物資生産の自給自足を圖ることもでき、これが完成の暁には、たとひ戦争が何十年續かうが、全世界を相手にして戦争をしようが、決して恐れる必要はなくなる。いひ換へれば、この東亞經濟プロックの確立、東亞に於ける自給自足圏の建設こそ、現在に於て何を措いても先づ行はねばならぬ急務なのである。

こゝに東亞經濟プロックといつたのは、經濟關係からいつたまで、これを政治的に見るならば、大東亞共榮圏の地盤の上に築き上げられる新體制、即ち東亞新秩序の建設を意味する。

IMT 517

46

この東亞新秩序の建設こそ、今事變の目標であり、國防國家の建設も、生産力の擴充も、その他あらゆる國策がすべてこの線に従つて處理されて行かねばならないものである。事實精神、物質兩面に亘り、國家の總力は、擧げてこの一點に集中されてゐるのである。従つて事變處理を眼目とする外交方針も、この方向に従つて推し進められてゐることは今更云ふまでもない。

このやうに東亞新秩序建設を目指す帝國外交の現れとして、現に記憶せらるべきものは、最近に於ては日支基本條約を初めとして、日獨伊三國同盟の締結、日ソ中立條約の成立、それに日・佛印經濟協定及び日・泰、日・佛印間議定書の締結がある。

### 日支基本條約

日支基本條約の成立並びに日滿支共同宣言によつて、わが國は南京政府を以て支

四五

IMT 517

47



那に於ける唯一正統の政府であることを承認し、また滿支は相互に承認しあふことになつた。この條約は近衛聲明の大原則に基き、善隣友好、共同防衛、經濟提携の實を具現し、東亞民族の解放と支那の光輝ある獨立とを確保した重大意義を有するものである。また新國民政府の承認と滿支の相互承認は絶對の條件であつて、かくして東亞新秩序建設の礎石は大磐石の重きを加へ、東亞諸民族共存共榮の理想を實現した第一歩として、世界歴史に一時代を劃した重大事實である。これは全く抗戰の迷夢にあがく重慶政權に對して一大鐵鎚を與へたものである。

三國同盟の狙ふところ

日獨伊三國同盟の精神は既に幾度か繰返し述べられた通り、日本は獨伊の歐洲に於ける新秩序建設に關し、また獨伊は日本の大東亞に於ける新秩序建設に關しそれぞれ

互ひに指導的地位を認め、且つこれを尊重するといふ點にあり、これに就いて、この三國が現在戰爭に参加してゐない國から攻撃を受けた場合には、經濟上、軍事上のあらゆる手段を盡して、相互に援助するといふのである。これによつて明かであるやうにこの三國同盟締結の趣旨といふものは、決して第三國に對して侵略を行ふとか、或ひは共同してこれを搾取しようとかいふのでなく、飽くまでも建設的であり、防衛的な立場を採つてゐるのである。いひ換へるならば、日獨伊三國が亞歐兩大陸に於いて相携へて新秩序建設に邁進しようとするのであつて、たゞこの新秩序建設の途上、他の無理解な國からこの事業の達成に妨害を受けた場合に於いてのみ、相提携してこれに對抗するといふのである。

元來限りある世界の資源を分有するにあたつて、一方に於いてあり剩る富と資源とを有し、他方に於いて人力はあり國民の性質も亦勤勉であるにも拘らず、たゞ十分な



資源を持たないがためにのみ、その國民が存分に發展できないとするならば、かうした状態にあること自身が既に不合理なわけである。のみならず、新興國が當然の權利たる生存權を主張するにも拘らず、舊秩序を固製するために、種々の束縛規定を設けて、これを抑へつけようとするに至つては、もはや不合理といふだけでは済まされなくなる。何等かの方法で、この不合理な舊秩序を變改しようとする運動が生ずるのは當然のことである。

總じて戦争といふものは人為的のものでなく、また或る特定の人物が勝手氣儘に干渉などをやつて生ずるものでもない。それは多くの出來事や現象が連続して生じた結果であり、また常に爆發せんとして抑へられてきた力の結果でもある。戦争は一つの進化の末端であるとともに、また其處から新しい進化を生ずる發端でもある。いはゞ或る國家群が、自分に都合のよい情勢を維持しようとするのに對して、新興の意氣に

燃える國家群が、この舊秩序を打破せんとし、こゝに新舊兩勢力の衝突が戦争となつて現れるのである。「戦争」といふ現象が生ずれば、常にそこには二つの異なる時代が相對立するのであり、その故に戦争は永久に革新する力である。東亞の新秩序も、歐洲の新秩序も、畢竟は新興國家群が、現状維持國家群の壓迫に耐へかねて、その理想と目標とを明かにしたものにならなないのであつて、この點に於いて、日獨伊三國は、その企圖するところに於て、その精神に於いて、全く相一致するのである。

この三國が相携へて進まうとするのは、いはゞ歴史の必然とも云ふべきである。

日ソ中立條約の目的

日ソ中立條約も、その精神に於てはこれと略々趣きを同じくしてゐる。即ち條約文



が示す通り、日ソ兩國は互ひに平和及び友好の關係を維持し、且つ相互に領土の保全及び不可侵を尊重するとともに、條約國の一方が第三國よりの軍事行動の對象となつた場合には、その紛争が繼續中は他の一方は中立を守るといふのである。従つて日獨伊三國同盟の如く直接的に新秩序の建設に協力、提携するといふことは表面上には現はれてゐないが、少くとも一方國の新秩序建設を妨害すべき第三國に對し、他方國が中立を守るといふ消極的な意味に於ては、この條約は依然、新秩序建設に對して大なる寄與を爲してゐることは明らかである。かく考へて來れば、アメリカを除く各大陸は、近い將來に於て、獨伊を中心とするプロツク、ソ聯を中心とするプロツク、及び日本を中心とするプロツクとに、ほゞ分割編成せられ、それ／＼安定が保たれることになり、またこれによつて新秩序の建設は極めて容易となる。而もこれらは三國同盟に配するに、さきの獨ソ不可侵條約及び最近の日ソ中立條約によつて、政治的連環

が結ばれてゐるのであるから、これこそ、平和確立の一大礎石であると云はねばならない。

**日・佛印協定**

次に日・佛印經濟協定であるが、この協定の成立によつて、佛印に於ける日佛居住航海條約、日・佛印間の關稅制度、貿易及びその決濟の様式に關する兩國間の協定が成立したのである。されば日・佛印間今後の經濟關係は、この協定によつてその密接さを増し、東亞に於ける日・佛印協力の新段階が開かれることになつた。また日泰、日佛印間協定書に於ては、日本は佛印・泰間の友好關係が安定確保することを希望して議定書を結んだ旨を明かにするとともに、日・佛印間に善隣友好關係を樹立し、泰、佛印ともに第三國との間に、日本に不利な政治的協定を結ばぬことを約してゐる。こ



のうち最後の一項は最も重要である。

敵性國の奸策を警戒せよ

以上の條約協定は何れも同一の精神から出たものであつて、わが國の立場からこれを見れば、東亞新秩序の建設といふことを建前にし中心にして行はれ、これを世界全體の地盤の上に築き上げようとする動きの現れである。またかうした諸條約をその補助とすることによつて、東亞新秩序は世界史的の大きな意味を持つことになるのである。ところが、英・米を初め反樞軸國が、これら條約により、その外交政策に重大な錯誤を來したことは明かであつて、従つて彼等は今後わが日本を初めとする新興國家群の勢力を抑制し、自國の勝手に作り上げた舊秩序をあくまでも維持せんとするであらう。英・米兩國は理不盡にも世界の富の大部分を壟斷し、事毎に新興國家の要求を

否認しようとしてゐる。それと同時に他面その宣傳謀略の手を通じて樞軸國內の分裂、意見の對立を誘致するため、あらゆる手段を通じて狂奔するであらうから、嚴にわが國內の輿論の統一を圖り、日獨伊樞軸は嚴然たる國策であることを思ひ、いやしくも彼等の奸策に踊るやうなことのないやうにしなければならぬ。

東亞の解放と米國の對日敵性

前にもいつた通り東亞新秩序の建設といふことのうちには東亞人の東亞、東亞の資源を東亞人の手で開發利用するといふことが、その建前とされてゐるが、現在の東亞、特に支那を中心とする南方一帯は、既に純然たる東亞ではなく、また支那も單なる支那ではなく、何れも歐米各國の植民地化されたる東亞であり、歐米人の搾取の對象とされてゐる支那である。よつて眞の東亞人の東亞を實現し、亞細亞人のための東亞の



資源たらしめるには、歐米の植民地と化した東亞を、それ本然の姿に取り戻さなくてはならない。植民地としての支那を、彼等の搾取の魔手より解放しなくてはならない。今次事變の原因は、いはゆる『東亞積年の禍根』たる歐米各國の東亞侵略にあり、これを排除せんとするところに今事變が持つ重大な意義がある。だから、事變處理の目標たる東亞新秩序の建設のためには、當然これが妨害となる歐米列國の干渉の手を封じなくてはならない。しかるにこの東亞新秩序の精神を否認し、あくまでも自國の在支權益を擁護せんとする英・米兩國は、事毎にわが國の對外政策に反抗の態度を示し、特に歐洲に於て英國の立場が次第に窮迫化するとともに、米國の對日敵性はますます露骨になつて來てゐる。

ハル國務長官が去る一月、下院外交委員會に於ける武器貸與案の聽問會に臨み、『過去の經驗と現下の進展から判斷すれば、提唱される太平洋區域の新秩序は、一國

による政治的制覇を意味する』と述べたり、次いでウエルズ國務次官も『日本の極東に於ける新秩序計畫は、同方面に於ける政治的並に經濟的霸權樹立を意味する』と云つてゐるやうに、米國は、わが死活的の要求たる大東亞共榮圈の本質に就ては敢て耳を籍さうとせず、否これを理解せんとする努力さへ拂はず、眞向から否定する態度に出てゐるのは、何よりもその對日敵性を最もよく表現したものである。

更にこれだけではない。米國は最近に到り遂に屑鐵の禁輸を全面的に實施した。これが狙ひは、わが國の製鐵量を激減せしめ、また一面技術上からも、わが製鋼作業を不可能ならしめんとする意圖に出たものである。いふまでもなく、鋼塊の製産高は一國工業力のバロメーターとも見らるべきものがあつて、米國の如き、最近に於ける生産高は八千五百萬噸内外といふ數字を示し、これより生ずる屑鐵の出廻り量は、既往に示された數字によれば、四千萬噸乃至五千萬噸であつた。そしてこのうちの極く



一部分が、米國東海岸よりパナマ運河を通じて日本に輸入されてゐたのである。それが歐洲戰亂のため歐洲海運國よりの備船が不可能になつたところへ持つて來て、米國が屑鐵輸出禁止を斷行したのである。

この處置は製鐵量の比較的少いわが國としては、もとより打撃には相違ない。しかしわが政府としては、米國が早晩かゝる措置に出ることは當然豫期されてゐたのであるから、これに對して既に事前から適當の處置を講じ、一面國內の廢品は勿論、現に使用中の鐵鋼製品をも回収してこれを補ひ、また技術方面では、國內の優秀な技術家を總動員して、この困難の克服に奮ひ立つた結果、今日では幸ひにも屑鐵を使用せずして、製鐵を行ひ得ることに成功してゐる。

### 米國の對日壓迫への反撃

かく見るならば、米國がたとひ屑鐵禁輸といふ取つて措きの最後の切札を出しても、われ／＼としては何等驚かざるのみか、莫大なる屑鐵輸入代金の支拂ひをせず、濟むことを、寧ろ幸ひとするものである。今後英・米各國が如何に奸策を弄し、如何に對日壓迫の手を進めようとも、われ／＼としてはもはや何等の痛痒を感ずるものではない。彼等が對日壓迫を進めれば進めるほど、われ／＼は更により大いなる力を以て、その進路を打ち破るのみである。

しからは米國を初めとする列強の東亞侵略の魔手は如何にして拂ひ除けられるか。執拗なる外國の侵略の手から如何にして離脱せんとするか。

それは云ふまでもなく支那事變を完遂し、その成果を確保すること以外にはない。たゞ人々の中には、日本は資源に於て恵まれず、結局經濟の點に於ては依然として英・米に依存せざるを得ないではないかと説く論者があるが、それは彼等が十年前の



日本の經濟、或ひは少くとも事變前のそれを基礎にして論じてゐるのであつて、四年に亘る事變にも拘らず、わが國の富が如何に蓄積せられ、わが戦力が如何に増大したかを知らざるもの、謂である。その結果、彼等は日本の經濟を戦争から切り離して考へてゐるのである。近代戦に於ては、一方に於てその成果を確保しつゝ、他方に於てこれを戦争遂行に役立たしめ、更にこれによつて戦力を大ならしめてゐるのである。即ち一國の經濟は常に動いてをり、その成長の過程に於てのみ、經濟の本質は捕へられるのである。だから、もしこれを靜止的なものと見ると、そこに現状維持論のやうなものが生れてくるのであつて、前に述べた英・米依存論者もいはばこの種に類するものである。かくしてはわれ／＼は永久に英・米の支配圏より離脱することが出来ず、何時になつても、東亞人の東亞の理想を實現することは出来ない。

事變解決はわが獨力に依つて

米國が屑鐵をくれぬといふならそれでもよろしい。石油を輸出せぬといへばそれでも結構、工作機械を賣らぬといへばそれでも構はぬ。われ／＼の背後には既に述べたやうな不動の信念と、赫々たる有形無形の成果とがあるではないか、技術方面に於ても亦、わが國の總力を集中し、わが技術の粹を蒐めるならば、敢て歐米に劣らぬ立派な機械が出来上ることは、着々事實となつて現れてゐる。またかくあつてこそ眞の國防國家への道が達成されるのである。日本は、こゝでどうしても國防國家體制を確立し、あくまでも強くならなければならない。無論今でも世界に於ける最強國の一つではあるが、更にもつともつと強くならなければならない。『戦はずして勝つ』——これこそ國防政策の上々なるものである。



わが國のこの不動の態度を見て、米國としては今後更にいろいろと對日壓迫の外交手段に訴へて來るかも知れぬが、日米關係がたとひどのやうに變化しようとも、わが國防國家體制を急速に強化して、この微妙なる國際關係にいつでも對應できるやうにしておかなければならない。

この意味から、日支基本條約を中心として、日・獨・伊三國同盟、日・ソ中立條約、日・泰、日・佛印條約などの成立は、國防國家完成の一環としての國防外交の成功であり、日本の世界に於ける地位をますます重からしめ、その國際的地位をいやが上にも高からしめたものである。しかしながら、もしこれらの諸條約に頼つてのみ支那事變を完成しようとするならば、それは全く本末を顛倒したもので、寧ろ逆に、わが國の國力をより増大し、内治外交をより強固にすることによつてのみ初めて、右條約の實効を收めることが出来るのである、支那事變の解決は斷じてわが國独自の力を以て行

はねばならぬ。そして、それは必ず可能なのである。

また日・ソ中立條約が成立したと云つても、これによつてわが國の防共の精神には何等變更を許さるべきでなく、防共問題はこの條約とはおのづから別個の立場に於て、従前よりも更に一層綿密に處理されねばならぬことを忘れてはならない。

### 事變の本質

米國政府當局はかつて、ライン河はアメリカ國防の第一線であると語つたが、このことから考へると、米國が今次のヨーロッパ戦争で、先にイギリスに對する武器貸與法を決定し、更にいはゆる哨戒制度を實施して、實質上參戰したにひとしいやり方をしてゐるのも決して偶然ではない。獨伊兩國は今イギリスと戦つてゐるが、それは



實質的には、イギリス並にこれを援助する米國との戦争である。

六二

同様なことは支那事變に就てもいへよう。

すなはちわれ／＼は表面蔣政権の軍隊と戦つてはゐるが、彼等の武器弾薬は、實は彼等の武器弾薬ではない。彼等の背後にあつてこれをあやつり、直接には自ら手を下さずして我國を攻撃しようとする歐米帝國主義諸國の武器弾薬である。それ故われわれは直接には重慶政権と戦つてゐるものゝ實は背後にあるこれら諸國と戦つてゐるものと見なければならぬ。これはイギリスに就てもはやいふまでもないことだが、今日盛に重慶へ軍需資材を密送し、また借款を提供して對日抗戦をしきりに煽り立てゝゐる米國が、米國防の第一線は重慶にあると語つたことを考へるとき、それは決して誇張の言葉でないことを知るのである。

従つて事變は、我が國が重慶政権に武力的に勝ちさへすれば、それで解決するので

IMT 517

64

はない。むしろこのやうに日支兩國を永く抗争させ、その間に漁夫の利を得ようとする歐米帝國主義國の手から、支那を、否東亞全體を解放して初めて、眞の解決は與へられるのである。その意味で本事變は、單なる日支間の戦争であるといふよりも、東亞全體の解放戦争であると考へなければならぬ。

この點はヨーロッパ戦争にしても同様である。洋の東西に於て戦はれてゐる現在の戦争は、アジャに於ても、ヨーロッパに於ても、均しく解放戦争であるといふところに、大きな特質があるのである。

### 舊秩序の本質

第一次のヨーロッパ戦争のとき、アメリカ大統領ウィルソンの調停で、無賠償無併合、民族自決主義といふ名目の下に休戦條約が結ばれたが、それから數ヶ月後に締結

六三

IMT 517

65



された講和條約では、ドイツ、オーストリア、トルコ等の協商國側は、その屬領のみならず本土の割讓をも要求され、何人が考へても支拂ひ不能と思はれるやうな賠償金を負はされ、民族自決主義の名の下に、イギリス、フランス、アメリカ等の大國は、思ふまゝに世界を料理してしまつた。その結果、世界の領土資源はいよゝ／＼持てる國に集中し、持たざる國は過剰の人口をかゝへて、狭少な地にひしめきあふことになつた。而も右の大國は、その物質文明が頂點に達して弊害續出し、生産機能も次第に低下し、それと共に惡質の犯罪は増加して社會の不安は漸次増大するといふ情勢にあつた。他方日本、ドイツ、イタリアといふやうな國々は、優秀な國民を擁しながらも、必要な資源を缺くために、生産は十分發展しないといふ實情にあつた。

丁度物を作らうとする時に、もう働く元氣もなくなり、道具も舊式のものしかない老人のところに立派な材料が豊富に偏在し、元氣一杯な、而も新式の極めて能率のよ

い道具をもつた有能な働き手のところへは、材料が廻らないといふやうなものである。これでは如何に力んでみたとところで、十分なものが作られやう筈がない。材料はそれをこなす能力に應じて配給されなければならぬのである。

事實日本の如きは、世界にもその比を見ぬほどに教育が普及して、國民の産業技術はかなり進んでゐる。また極めて勤勉である。何人も終日働くことを當然としてゐる。ヨーロッパ人のやうに、晝飯の前後に晝寝をするといふやうな習慣は我國には全く見られない。のみならず人口は豊富であり、ヨーロッパ人に比べればまだ／＼増加率も旺盛である。いはば非常に條件のよい生産工場のやうなものである。しかし残念なことに肝心の材料が手に入らないのである。

日本の北に、南に、豊富な天産があるにはある。しかし殊に豊富な南方からの材料は、それが主としてイギリスの屬領から來るために、昭和七年にイギリスが開いた



六六  
はゆるオツタワ會議の結果、日本には入らぬこととなつてしまつた。即ちイギリスが本國と屬領との關係を密にし、相互扶助の經濟關係をつくるといふ美名の下に、本國は出来るだけ澤山の原料や食料品を買ふ（日本などへは賣らせないで）代りに、屬領は本國の工業製品を買ふやうに取極めたものであるが、これは日本工業の南方進出に驚いたイギリスの苦肉の策の一つである。これが人道上からいつても誤つてゐることはいふまでもない。われ／＼の方では立派なものを廉價に作らうといふ準備は、すっかり出来上つてゐるのである。こゝへ材料さへ廻してよせば、直ちに立派なものに仕上げて、世界人類のためにも大きな貢獻をすることが出来るのである。のみならず經濟的にも、原料はなるべく近くの工場へ運んで加工した方がよいことはいふまでもない。日本は東亞のすぐれた工場のやうなものだから、こゝへ材料を廻すことが天の理に叶つてゐるのである。それをわざ／＼イギリスやアメリカ邊まで船で運ぶと

いふのは、これらの國がたゞ自國の利益を守るために、この正道を妨げようとするものである。

もしもかうしたことが永く續けられるならば、世界の生産機能は衰弱低下し、人類全體にとつて由々しき大事に至るべきは必定である。

それは既に東亞に於て始つてゐる。東亞は世界で最も豊饒な食料品の生産地であるにも拘らず、インド、支那を併せて年々數百萬に及ぶ餓死者が出てゐるのは、實にここに原因があるのである。而も食料を自給し得ないヨーロッパに一人も餓死者が出ぬのみか、むしろ贅澤な生活をしてゐるのに、食料の供給地であるアジヤに餓死者が出るといふことは何を意味してゐるか。われ／＼はこゝにアジヤのなしとげねばならぬ課題を見出すのである。即ちアジヤの民をして生かしむることが、喜色あらしむることが、われ／＼の使命なのである。餓死をもつてせまられてゐるこの窮狀からアジヤ



を解放することが、われ々の使命なのである。

この意味に於いて、今われ々が戦ひつゞけてゐる支那事變は、一つの解放戦争であると思ふべきではない。

### 世界新秩序への先報

この解放戦争に先鞭をつけ、今尙敢然と戦つてゐるのは、外ならぬ我が日本である。昭和六年の満洲事變こそは、まさにその第一歩であつた。かつて満洲の獨裁者であつた張作霖、張學良が、満洲は、日清、日露の役に於けるわが國の多大の犠牲によつて初めて安泰なるを得たことを忘れて、一、二歐米帝國主義國の使噓のまゝに、わが正當なる權益を無視し、右列強の進出を許して、全東亞の植民地化に拍車をかけようとしたことに、その原因があつたのである。即ち、それは過大の植民地を所有して

尙かつ東亞の支配權を増強し、わが國の發展をあくまで阻止しようとした國家の手に乗つて、暴狀を擅にしてゐた張家父子への痛棒であり、同時にこの背後の國家への反撃でもあつたのである。今にしてこれを破つておかなければ、われ々の願ふ世界に調和ある新秩序の成る日は到底到来しなかつたからである。こゝに於いて我國は昭和八年、列強の反撃を斥け、當時はなほ有力な機關であつた國際聯盟を敢然脱退して、我が強固なる決意を中外に宣明し、以て滿洲國の成立を助長し、率先これを承認したのである。いふまでもなく當時の國際聯盟は、巨大なる植民地を領有して現状の維持を最大の眼目としたイギリス及びフランス等の世界支配の代行機關に外ならなかつた。それ故世界のこの舊秩序に肅正を施して、眞に公正にして調和あるものたらしめようとするれば、何よりもまづこの聯盟の機構を改むる以外に途はなかつた。即ちイギリス及びフランスの世界政策を變更せしむる以外に途はなかつたのである。されば



我國の滿洲國承認、それに續く聯盟脱退は、まさにこのイギリス的フランス的世界政策の打倒、世界舊秩序の變改を要求したところの、實に世界史的意義を有する大事件であつた。支那事變と雖もこれと同じ精神に出でたものであることはいふまでもなく、いはゞ支那事變は先きの滿洲事變の繼承であるとも見るべきである。

これによつて考へれば、我國は今次の世界新秩序建設運動の先驅をなしたものであるといはなければならぬ。事實ドイツ、イタリヤがこの新秩序建設運動に乗り出したのは、我が滿洲事變の後を受けてのことである。ドイツがヴェルサイエ條約を一擲して再軍備宣言を行ひ、新秩序建設の意志を明かにしたのが昭和十年、その意志實現の第一歩として行つたライン地方進駐が昭和十一年、オーストリアを併合、更にポーランドに進駐して、いよいよその建設に乗り出したのが昭和十三年、他方イタリヤに就いて見れば、エチオピア戦争を開始して地中海・北アフリカのイギリスの勢力を打破し

七〇

ようとしたのが昭和十一年、國際聯盟を脱退したのが翌十二年である。

わが國では、從來とかくヨーロッパ中心に物事を考へるやうに習慣づけられてゐるために、わが國がこの世界新秩序建設の光榮ある先達をつとめてゐるといふこと、ともすると看過せんとする傾向のあることは、むしろ腑甲斐ないくらゐだが、とにかく何れにしても、わが國が今日世界新秩序のために果敢な戦を續けてゐるといふ事實は、決して覆へざるべきものではない。われ／＼はわれ／＼自らのために、東亞人體のために、東亞の解放戦争、新秩序建設戦争をやつてゐるのである。

支那事變の本義

従つて本事變の根本的解決は、先きにもいふやうに、單に重慶政權を武力的に壓伏することによつてもたらされるものではなく、重慶政權下の民をして眞に喜色あらし



め、更に彼等を我が新秩序建設の協同者となすことによつて初めて得られるのである。事變に對するこの見解は、その勃發以來わが國の堅持して來たところで、決して今に始まるものではない。これが事變勃發以來、一貫して變らぬ我國の方針であり、目標であつた。即ちこの精神を最初に明確に述べたのが、昭和十三年十一月三日に發表された帝國政府の聲明である。これは、わが日本の希望するところは支那の滅亡ではなく、支那の興隆である、支那の征服にあらずして支那との協力である、といふ建前から、「帝國の冀求するところは東亞永遠の平和を確保すべき新秩序の建設にあり、今次聖戦の目的またこゝに存す」ることを明かにし、更に進んで

『この新秩序の建設は日滿支三國相携へ、政治、經濟、文化等各般に亘り、互助連環の關係を樹立するをもつて根幹とし、東亞に於ける國際正義の確立、共同防共の達成、新文化の創造、經濟結合の實現を期するにあり、これ實に東亞を安定し、

世界の進運に寄與する所以なり。

帝國が支那に望むところは、この東亞新秩序建設の任務を分擔せんことにあり、帝國は支那國民がよく我が眞意を理解し、以て帝國の協力に應へむことを期待す。固より國民政府と雖も從來の指導政策を一擲し、その人的構成を改替して、更正の實を擧げ、新秩序の建設に來り參するに於ては、敢てこれを拒否するものに非ず』と、我國の意の存するところを中外に闡明したのである。

この互助連環といひ、任務の分擔といふことは、同日行はれた近衛首相のラジオ放送の中にも敷衍されて述べられてゐるが、その中には

『日本は、東洋人としての自覺に目醒めたる支那國民と相携へて、眞に安定せる東亞の天地を築かんと欲するものであります。實に支那の民族的情勢を認識し、支那の獨立國家としての完成を必要とすること、日本ほど切實なるものはないのであり



ます。等しく東亞に相隣する日本と滿洲と支那の三大國が、各自の個性を存分に生かしつゝ、東亞保全の共同使命の下に固き結合をなすべき關係にあることは、正に歴史の必然であります』

と説かれてゐる。

これによつてわが國の今日企圖してゐるものが、東亞人自らの手によつて、我が東亞を歐米の帝國主義的支配から解放するにあることは、十分明かである。而もそれが單なる掛聲に終るものでないことは、建國以來僅か十年の滿洲國が、政治、經濟、文化の各方面に亘つて隆々たる發展を遂げてゐる事實に徴しても疑ひなきところである。

新國民政府の成立

我國のこの態度に應へて起つたのが、今日逐次健全なる發展をとげつゝある汪精衛氏を首班とせる國民政府である。本政府は昭和十五年三月、南京に還都して正式に新支那中央政府として成立した。國民政府はその成立と同時に十大政綱を發表し

『善隣友好の方針に基づき、和平外交をもつて中國の主權、行政の完整を求めて、東亞永遠の平和及び新秩序建設の責任を分擔す』

『友邦各國の正當なる權益を尊重し、茲にその關係を調整し、以て友誼を増進す』と述べてゐるが、これ、わが國の事變調整の精神に則つたものであることは今更いふまでもない。よつて我國は昭和十五年十一月、正式にこれを承認し、爾後事變處理に關しては、新政府と積極的に協力しつゝあるのである。

事變處理のかうした方式は實に我國の創造に係るところで、實に世界的意義を有するものである。赫々たる勝利によつて如何やうに處理しようとも勝手な位置にあり



ながら、東亞解放の大精神に基いて、支那との完全なる和衷協同のみを求めんとするわが國の公正なる態度は、恐らく後世史家の特筆に値するところであらう。

七六

東亞新秩序と大東亞共榮圈

しかしながらここに注意すべきは、わが國のこの東亞新秩序建設は、單に日支の、或は日滿支の互助連環體制のみをもつて確立せられるものではないといふことである。如何にも東亞新秩序は、日滿支が歐米の帝國主義的支配から解放せられた體制であるべきである。併しその解放せられた體制が、直ちに東亞新秩序として存立し得るのではない。この新秩序を不利とする歐米帝國主義國の攻勢を反撃して、これを安固なるものとするには、何よりもまづ東亞全體の經濟ブロックを形成して物資生産の自給自足を確保し、その物質的地盤を固めなければならぬ。このためには單に日滿支

三國のみならず、東亞の諸民族が一體となり、自己の生命を養ふに足るだけの地盤を獲得する必要がある。それは同時に、東亞の諸民族を單に我々日滿支三國に協力させようとするだけのものではなく、進んでこの諸民族に各々その所を得しむる唯一の道である。従來東亞の資源は遠く歐米にもち去られ、少しも東亞のためには活用せられなかつた。例へば南方から出るゴムは世界全産額の殆ど全部を占めてゐるが、果して南方の諸民族を益してゐるだらうか。これなくば白人に來り侵されることもなく平和な生活を續け得たらうものを、却つて彼等はそのためにたゞ酷使せられる憂き目を見てゐるのである。われ／＼はこれらの民族を解放し、彼等が生産したものは、彼等の生活を幸福にするためにあらしめるやうに計つてやらなければならぬ。われ／＼が東亞に於て建設しようとするのはかゝる體制である。それ故、東亞新秩序は、同時にまた大東亞共榮圈と呼ぶべきものなのである。

七七



大東亞共榮圏とは、政治的にいへば、まづ日滿支を中心とし、インド支那半島、マレー半島、蘭印その他を広く包含する地域である。経済的にいふと、日滿支の経済ブロックを發展させ、それに南方資源を包括させる一大経済ブロックを指すのである。そしてこの圏内に於ては各民族が互に理解して、その特色をそれごとくよく生かしていかなければならないが、さうかといつて決して大東亞共榮圏は、東亞諸民族の民族主義的結合を意味するものではない。もとより東亞は英米流の帝國主義的支配から解放され、その間に如何なる搾取も抑壓もあるべきではない。各民族はその還ましい意力と知性をもつて各自自由に活動し得るものでなければならぬけれども今すぐ各民族の還ましい意力と知性とのみによつて、新秩序建設に進むことができるといへば、それは不可能である。永い間の被虐によつて、各民族は直ちに立ち得るだけの意力と知性とを喪失させられてしまつてゐるからである。

従つてわれ々は先づ東亞の諸民族を、東亞に於ける唯一の強力な道義國家日本を中心集結させ、その力によつて東亞に對する歐米人の觸手を一掃することから始めねばならぬ。即ちわが國がこの大東亞共榮圏建設の中心となり主體となつて、各民族の上に被ひ覆さつてゐる壓力をとりのぞき、そして各民族に、自由な息吹を與へて、その意力と知性とを回復させてやらねばならぬ。

こゝに於てわが國は、何よりも先づ實力をもつて新秩序の建設に向はねばならぬ。今日の世界情勢は我國に有利に展開しつゝあるが、世界の情勢をかく展開せしめたものは外ならぬ、我國の實力である。しかし實力とは單に經濟力や武力ではない。經濟力や武力を裏づける徳がなくてはならない。即ち徳と力と兼ね備つて初めて建設の業は成り、新秩序は實現されるのである。



## 國防國家體制の建設

支那事變は東亞解放戦争である。東亞を東亞人の東亞たらしめようとする解放戦争である。

それだけに本事變の解決はなかく困難である。東亞から莫大の富を搾取することによつて榮えて来た帝國主義諸國は、東亞を是非とも現状のまゝに止めておかうとする。本事變が勃發以來滿四年を経過して、なほ解決に至らぬ最大の理由はこゝにある。彼等が手を代へ品を代へ、あらゆる術策を弄して、我が目的の貫徹を妨げてゐるからである。

### あくまでも國力を充實せねばならぬ

しかもかうした状態は、早急に改善されようとは思はれぬ。殊に東亞に於ける最大の現狀維持國であるイギリスが、我が盟邦獨伊と戦つて形勢日に非なる現在、今東亞より少しでも手を引くことは、やがてその全面的な後退を意味する。従つてイギリス並にこれを援助する米國が、我が東亞新秩序建設に協力するといふことは、少くとも現在に於ては、全く期待できないところである。即ちわが國が事變の目的を貫遂するために、榮えある明日を建設するためには、今日見えざる敵手が如何に巧妙に我が事變遂行を阻害しようとするか、斷乎これを拂拭して目的貫徹に邁進することが必要であり、同時にそれが出来るだけの國力を充實せしむることが、絶対に必要である。



今日の外交情勢は我國に有利に轉回してゐる。日獨伊三國同盟はこれに加盟するもの次第に多く、實質的にも漸次強化せられ、また日ソ中立條約の締結によつて、兩國間の外交調整に巨歩が進められ、更に南方に於ても、日本を仲介とした泰・佛印の平和條約、日・佛印經濟協定も締結されて、東亞新秩序建設に一の重大な礎石の役目を果してゐる。かうした外交的勝利は、單に口先の交渉のみによつて得られたものではなく、わが國の國力を背景にして初めて築かれたものである。従つてこの外交的勝利になほ實り多からしむるものは、獨り我が國力の充實あるのみである。われは、わが目的貫徹のために、あくまでも我が國力を充實せしめねばならぬ。

### 生産力擴充の必要

かくて今日我々の努むべきは、たゞ國力の充實、國防國家體制の建設にある。

もちろん國力の充實は、資源の確保、増殖、並びにその活用によつてもたらされ、必ずしも直ちに國防國家體制の樹立を必要としないといふものもあるだらう。生産力を増大するに必須な物的・人的資源にこと缺かず、またその配置宜しきを得るならば綜合國力は十分に發揮せられる。こと改めて國防國家體制の建設を唱へるの要はないであらう、との意見もなり立たう。また假りにその建設が必要であるとしても、それはたゞ生産力の擴充に中心をおけばよいとの主張もなし得られよう。事實近頃世間の國防國家體制についての見解には、かうしたものが多いやうである。

しかし國防國家體制とは、たゞこのやうに考へてよいものだらうか。もとより國防國家體制にあつては、生産力が擴充されなければならぬ。特にわが國の如く、大東亞共榮圏の建設のために幾多の開發資材を必要とする場合、生産力擴充は全く至上命令である。



自由主義經濟の時代には、この生産力擴充を個人の自由競争にうつたへてその目的を達成しようとした。明治以降のわが國經濟政策にも、この傾向が顯著であつた。また事實それは極めて効果ある政策であつた。徳川鎖國三百年の泰平に酔ひ、迫り來る歐米の帝國主義的侵略をも知らずして、傳統の農業と手工業とに固執してゐた國民には、利をもつて企業心をよびさまし、その活動を獎勵することが何よりの急務であつた。開國以來幾何もなくして日清・日露の役を戦ひ、大正、昭和の繁榮をもたらし得たのは一にこの政策の賜ものであるともいへよう。

しかし今日は、限られた人的、物的、資源を最大限に利用し、而も出来る限り急速に國防力の充實を計らねばならぬ時代である。かういふ時に、國家經濟全體に就ての十分な見透しをもつてゐない個人の努力では、それが如何に必死になされようとも、役に立たぬ。國家經濟の全貌をよく知つた人の計畫的な指導が、どうしても必要とな

つてくる。寸分の無駄もないやうに、全生産力を最大限に利用することが何よりも肝要であり、これには正しい計畫と統制とが是非とも必要となつてくる。自由主義的方式によるテンデンバラ／＼の生産力の擴充では、この目的を達せられない。今日必要なのは計畫ある生産力の擴充である。國防國家の要求する生産力擴充とは、この意味のものなのである。

元來國防國家體制とは、國家のうちに含まれてゐる凡ての活動を、國家の發展に都合のよいやうに營む國家のことで、單に軍備のみの充實した國家をいふのではない。政治も、經濟も、文化も、悉く國家發展の立場から考へられ行はれる國家をいふのである。即ち國防國家體制にあつては、自分個人の金儲も、國家の向上發展といふことと直接結びついてゐることが肝要なのである。武力によつて國家の向上を計るだけでなしに、凡ての國民の凡ての働きを通じて、國家をよりよきものにしようとする國



家である。

國防國家と國民生活

従つて國防國家體制では、國民が勝手氣まゝなことをするのは許されない。しかしそれは、たと國民が、自分ひとりだけよければよいといったやうな勝手氣まゝが許されないだけのことで、國民全體として楽しく生きることが出来るやうに、國民全體として、たと現在だけでなく、將來にかけて榮ある生活をなし得るやうに、専念する國家體制なのである。

國家がかういふ形をとることは、殊に現在のわが國のやうに、國家の總力を發揮して支那事變を戦ひ、今後何年かゝらうとも東亞新秩序を建設して行かうとするやうな場合には、是非とも必要なことである。國內で國民各自がいゝ加減なことをやつてゐ

たのでは、國家はこの重大な使命を果すことは出来ないからである。

そして今日では、國力の増大といふことは、同時に國家の防衛といふことと直接結びついてゐる。國民の一人でもがより強力な國家觀念をもてば、それだけ國防力は増大したのであり、一噸でも餘計に鐵を作れば、それだけ國防力は増大したのである。今日はこのやうに凡てを國力の増大、國防力の強化といふ點から行ふことが必要なのである。生産力の擴充も、この意味に於いてなされねばならぬ。たと財をより多く生産し、富を増大させるといふことのためだけでなく、國家防衛のための生産力擴充であるといふことが大切である。即ちわれゝのいふ生産は、國家の防衛と一緒になつた生産である。

今わが國は東亞全民衆の解放とわが國自體の防衛のために、支那事變を戦つてゐる。東亞の天地から歐米帝國主義勢力を拂拭しようとして戦つてゐる。東亞に産する莫大



な資源をもち去つて、東亞民衆を酷使してゐる歐米帝國主義と戦つてゐる。従つて吾の生産は、この戦ひをつゞけてゐる國家の防衛活動と一體となつてゐなければならぬ。たゞ國內で物資を生産し、東亞防衛のために資材を供給するといふだけではなしに、生産活動自體が、この防衛の一翼として働かねばならぬ。かうなつて初めて生産と防衛とが一體となり、生産も防衛も國家的な意義を果してゐるといへるのである。だからわが國の生産力擴充は、單に國內問題としてではなく、われ／＼が今建設しようとしてゐる大東亞共榮圈に於ける生産力擴充の問題として考へなければならぬ。生産力擴充の國防國家的な意味はこゝにあるのである。

今やわが國は大東亞共榮圈、東亞新秩序の建設をめざし、歐米帝國主義を驅逐するために戦つてゐるのに、たゞ經濟だけが、或はまた國民生活そのものが、それと無關係にあるといふのでは話が合はぬ。滿洲國の健全な發達のために、滿洲國の資源を我

が生産擴充に利用してゐるが、同様のことは大東亞共榮圈に於ても亦要求されなければならぬ。この廣大な地域に立脚して初めてわが國の生産力擴充は實力を發揮することが出来るのであるし、従つてわが國の經濟乃至國民生活も、その目的のために必然動員されねばならぬ。

國防國家體制は、經濟に對してこのやうな要求をもつてゐるが、同様に政治に對しても、平時の政治、戦時の政治といふやうな全然別のものとせず、いつでも強力に國家の發展に貢獻することが出来るやうにあることを求めてゐる。

議會中心主義と國防國家

元來イギリスなどで議會中心の政治が行はれるやうになつたのは、國內に於て相對立相抗争する貴族、僧侶、市民を一堂に集めて、話合ひをつけようとしたことに始ま



る。しかも少数派は多数派に屈従することを強ひられ、少数派は絶えず他日勢力の挽回を計つて止まぬので、やはり争ひの絶え間はない。これ議會第一主義が對立抗争を前提としてゐるといはれる所以である。

平時はこれでもよいかも知れないが、戦時となると忽ち困つてくる。國內で議論沸騰としてゐたのでは、迅速機敏を要する戦機を逸してしまふ。今度のヨーロッパ大戦でも、國防國家體制をとり、政治に平戦兩時共通の統制ある體制を確立してゐたドイツが、常に先手を打つて華々しい勝利をあげてゆくのに對し、労働黨と保守黨とが相抗争してゐたイギリスは、常に後手ばかり打たねばならなかつたといふことに照らしても明かである。そこで今日では、世界各国とも、この國防國家體制をとらうとしてゐる。イギリスや米國のやうな民主主義を標榜してゐる國でも、事實上はチャーチル、ルーズヴェルトの獨裁で、國防體制の強化に邁進してゐる始末である。

もとより、何んな形の政治が平戦兩時共通の國防國家的政治形態であるか、といふこととに關しては、各國その傳統を異にする故、一概にはいへぬ。ドイツの政治形態がよいからといつて、直ちにとつてもつて我國に移すことは出来ぬ。移すとしてもそこに特殊の工夫が要る。たゞ國民の凡ての思想、意志を、國力の充實發展といふ一點に集中して惜しまぬといふことが、國防國家的政治形態の中心をなすのである。従つてやもすれば従來陥りやすかつた、イギリスを範とした闘争本位の自由主義的議會第一主義的政治思想は、速かにこれを克服するの要がある。我國は立憲國であるが、イギリスなどのやうな議會中心國家ではなく、議會は初めから大権翼賛のための一機關であることをよく自覺する必要がある。而して新に生まるべき政治は、國民の悉くが眞に國家的自覺に徹し、一身上の利害得失を措いて心身を國家に獻げるといふところにあらねばならぬ。従つて政治の課題は、それがどれだけ個人の要求を反映してゐる



九二  
かといふことよりも、國家と運命を共にしようとする國民の心情をどれだけ捉へ得て  
あるか、また國家の向ふべき方向をどれだけ指導し得たかといふことのうちに存する  
のである。

大政翼賛會の意義

・それ故政治の實際としては、國民をして自らかく行爲するやうに組織することが肝  
要である。優れたるもののみがかくなり得るのではなしに、凡庸のものも亦自らかく  
なるやうに組織することが適切である。國民は各々の持場々々で、私心をすて各自の  
仕事に勵み、臣道を實踐すればそれでよいのであるが、持場や仕事に何等の連絡もな  
ければ、結果は支離滅裂に終り、力は十分結集されぬ。即ち組織が必要となるのであ  
る。政治がさうなつてゐれば、國民は完全に一體となつてゐるのだから、平戦何れの

時を問はず、それは國力の充實發展に最も適したものであるといふことが出来る。と  
ころでかうした政治の形態は、實は我國の政治に傳統的な本質であり、今日これを具  
體化したものが、かの大政翼賛會である。われ／＼がこれを強化し得るか否かは國防  
國家體制の成否を決するものである。われ／＼は不純なる動機よりするあらゆる策動  
を排除して、大政翼賛會の健全なる發達を助長せねばならぬ。これは單に當局者ばか  
りでなく、實に國民全體の責任である。

このやうにして國防國家體制が建設せられるならば、われらの前途は實に洋々たる  
ものとなり、事變は何年續かうと、大東亞共榮圈の確立にどれ程の長年月を要しよう  
と、平氣でゐられる筈である。またわが方にこの構へが出来て初めて、全東亞の民衆  
も心からわれに信頼し、事變も眞の解決を見るに至るのである。

國防國家體制の建設はわれ／＼の最大のつとめである。



結 語

以上述べたことは、支那事變第四周年を迎へるに當り、本事變は如何にして起り、如何にして終るべきかを述べ、その真意義の何であるかを明かにし、更に本事變解決の途は、内は國防國家體面を確立し、もつて外に對し攻撃再戦を強化する以外にないことを指摘したのである。

もともと國防國家體面建設の急務であることは我が一體同胞のよく知るところであるが、この事變の成否は、實に我が國運の消長を決する程に重大なる意義を有してゐる。そしてこの建設が一日早ければ大東亞共榮國の建設も亦一日早く、一日遅ければ大東亞共榮國の建設そのものも亦一日遅く、ぐづ／＼してをれば折角の共榮國が臺

なしになるかも知れぬ。我に一分の隙があれば、機を逸せず吾を衝かうとするものがある今日、油断はならぬ。國民は今日のわれ／＼の一舉一動が、我が子々孫々の運命を決する程の重大なる意義を有することを自覺し、今日一時の弛緩がやがて我國百年の悲運を招來することのあるべきを悟り、如何なる困難があらうとも一步もゆるがす不退轉な決意をもつて、いよく努むるところがなければならぬ。

恭くも支那事變一周年に際して賜りたる勅語に

今ニシテ積年ノ禍根ヲ斷ツニ非スシハ東亞ノ安定永久ニ得テ望ムヘカラス 日支ノ携攜ヲ堅クシテ共榮ノ實ヲ擧クルハ是レ洵ニ世界平和ノ確立ニ寄與スル所以ナリ 官民愈々其ノ本分ヲ盡クシ艱難ヲ排シ困苦ニ堪ヘ益々國家ノ總力ヲ擧ケテ此ノ世局ニ處シ速ニ所期ノ目的ヲ達センコトヲ期セヨ

と仰せられたる 聖旨を奉體し、拮据黽勉もつて 聖慮を安んじ 奉ると共に、本



事變を裁定して東亞永遠の平和、東亞永遠の共榮體制の確立を期すべきである。かくてこそ戦場に於いて、或は殪れ或は傷きたる我等が同胞の、輝しき業績に對しても、恥づるなきを得るのである。

### 支那事變經過日誌

(自昭和十二年七月七日  
至昭和十六年五月上旬)

年		月		日		日	要
昭和二十年		七	八	七	八		
(紀元2597) 西曆1937)		七	八	七	八	日	<p>盧溝橋事件勃發 帝國政府北支派兵決定の聲明を發す ○香月中將支那駐屯軍司令官に補さる 脚坊事件起る 陸軍機出動、爆撃開始 香月司令官宋哲元に最後通牒を發す 第二十九軍所轄の總攻撃を開始 通州事件起る</p> <p>北平入城 上海に大山大尉事件起る 廟議上海派兵に決し、重大聲明を發す ○上海陸戰隊攻撃を受け應戦 ○海軍機翌十五日にかけて第一回波洋爆撃敢行 帝國政府暴支所懸の重大聲明を發表す ○日高參事官等南京引揚げ ソ支不可侵條約發表さる ○中央軍山東に進出 陸軍部隊羅店鎮方面揚子江沿岸及吳淞鎮附近に敵前上陸 ○居庸關陥落 第三艦隊司令官揚子江より汕頭に至る支那沿海に於ける支那船舶の航行遮断を宣言す 張家口入城 ○海の荒鷲南京を空襲す</p>
二十七日	二十三日	二十三日	二十三日	二十三日	二十三日	日	



(紀元2597)  
西曆1937

年 二

月 一 十

二 十 九 日  
十 六 日  
十 三 日  
十 二 日  
十 一 日  
九 日  
六 日  
五 日  
二 日

月

二 十 三 日  
二 十 四 日  
二 十 七 日  
二 十 八 日  
三 十 日  
三 十 一 日

陸軍機太原を連日爆撃  
陸軍部陸杭州灣金山衛一帶地區に奇襲敵前上陸決行  
(日獨伊三國防共協定ローマにて調印)  
上海包圍陣成る ○松江、太原占領  
皇軍浦東上陸 ○陸軍機洛陽猛爆  
北支及内蒙方面に作戦せる陸軍將兵に對し優渥なる勅語を賜ふ  
白茆口敵前上陸、嘉定占領 ○陸軍機西安空襲  
國民政府、軍事關係機關を除く其他の行政機關を南京より奥地に移すに決定、重慶を臨時首都とす  
常熟、蘇州、嘉興陥り、黃浦江水路啓開成る  
上海方面に作戦中なる陸軍將兵に對し優渥なる勅語を賜ふ  
○大本營設置せらる ○國民政府重慶遷都の旨公表

大場鎮及江灣鎮方面に對し總攻撃開始  
大場鎮、廟行鎮占領  
上海戦線に於て陸軍部隊、陸戦隊と握手 ○九國條約會議不参加を臨時閣議で決定  
蒙古聯盟自治政府成立  
陸軍機太原連爆、敵地上機十五機撃破、二機を撃墜す  
蘇州河渡河敢行

十 和 昭

十

月

九

十 十 十 十 九 八 四  
八 七 四 二  
日 日 日 日 日 日 日

二 十 十 十 十 十 十 十 十 十  
七 四 二 一 八 五 三 二  
日 日 日 日 日 日 日 日 日 日

臨時閣議に於て北支事變を支那事變と改稱に決定  
駐露陸軍機占領 ○第七十二臨時議會召集せる  
海軍中支艦隊司令官支那艦隊の全支那洋行差斷を宣言す  
陸軍機上海戦線に出動  
大編隊を占領 ○國民政府日支問題を華要に提議  
上海方面に松井大將 北支方面に寺内大將をそれぞれ、兩方面の最高指揮官に任命せる旨陸軍省發表  
蘇州入城  
陸軍機太原空襲敵七機を撃墜 ○海軍機南京連爆、敵三十二機を撃墜  
九月二十一日以後南京空襲に關し第三艦隊司令官長官より第三艦隊に對する通告書に支那非戦闘員に對する警告を發す  
海軍機廣東連爆、敵十九機を撃墜  
海軍機太原空襲、敵七機を撃墜  
保定、滄州陥落 ○海軍機漢口初空襲  
濟南占領  
上海戦線に於て陸軍機猛爆  
正定占領  
石家莊攻勢  
國民精神總動員中央事變委員會式  
要路を完全占領  
包圍占領 ○陸軍機太原、太谷暴撃  
海軍機漢口空襲、敵地上機大小二十五機撃破

九九



年三十 (紀元2598 西曆1938)		
月四	月三	月
三十三 二十九 二十 十九 十八 十七 十六 十五 十四 十三 十二 十一 十 九 八 七 六 五 四 三 二 一	二十八 二十五 二十四 二十三 二十二 二十一 二十 十九 十八 十七 十六 十五 十四 十三 十二 十一 十 九 八 七 六 五 四 三 二 一	二十 二十一 二十二 二十三 二十四 二十五 二十六 二十七
台兒莊占領 陸軍機務總上空空戰に於て敵二十四機を撃墜 海軍機務天河、白雲、從化爆撃、敵十五機撃墜 沂州入城 海軍機務漢口空戰に於て敵五十一機を撃墜 支那方面艦隊司令官に新たに及川古志郎中將任命さる	曲沃占領 蒲州占領 海軍威海衛占領 陸軍機務陽空襲、敵二十二機を撃墜爆破 第三十三回陸軍記念日 ○中國聯合準備銀行開店 (獨逸合邦成る) 陸軍部隊崇明島に上陸 國家總動員法成立 陸軍機務德飛行場攻撃、敵十四機を撃墜 中華民國維新政府南京に成立	海軍機務宜昌、衡陽、麗水等空襲、敵二十一機爆破 軍司令官胡香中將宮御歸還、上海方面最高指揮官松井大將、杭州灣上陸軍司令官 柳川中將歸還、畑俊六大將新たに同方面最高指揮官に親補さる 海軍機務南昌空襲、敵三十七機撃墜 潭州占領 臨汾占領

和 昭		年二十和昭 (紀元2597 西曆1937)	
二	月一	月二	十
十九 十八 十七 十六 十五 十四 十三 十二 十一 十 九 八 七 六 五 四 三 二 一	二十六 二十五 二十四	二十 十九 十八 十七 十六 十五 十四 十三 十二 十一 十 九 八 七 六 五 四 三 二 一	二十 十九 十八 十七 十六 十五 十四 十三 十二 十一 十 九 八 七 六 五 四 三 二 一
蚌埠占領 芝罘占領 中支一帯の敵財産軍事管理に決定し、陸軍當局談を發表す 黄河作戦開始 ○日支經濟協議會設立決定	海軍封鎖部隊の一部青島を占領 濟寧占領 ○御前會議に於て對支最高方針確立す 「帝國政府爾後國民政府を相手とせず」との重大聲明を發表す 北支方面最高指揮官寺内大將北京に移駐す 海軍機務宜昌初空襲	陸海軍機務連續南京痛撃、敵二十數機爆碎 南京城の包圍陣完成 ○蔣介石南京を脱出 午後一時を期し南京總攻撃開始 ○光華門占領 (伊國、國際聯盟退通告) 南京攻略成る ○パネー號事件起る 北京に中華民國臨時政府成立(北平を北京と改稱) 南京入城式舉行さる 海軍機務蘭州連爆、敵十七機撃墜 杭州占領 ○第七十三通常議會召集さる 長谷川支那方面艦隊司令官青島への交通遮斷を宣言 濟南入城	







三 年		(紀元2598) 西曆1938	
月	日	月	日
十	四	一	十一
九	三	二	十
八	二	三	九
七	一	四	八
六	二	五	七
五	一	六	六
四	二	七	五
三	三	八	四
二	四	九	三
一	五	十	二
	六	十一	一
	七	十二	二
	八	十三	三
	九	十四	四
	十	十五	五
	十一	十六	六
	十二	十七	七
	十三	十八	八
	十四	十九	九
	十五	二十	十
	十六	二十一	十一
	十七	二十二	十二
	十八	二十三	十三
	十九	二十四	十四
	二十	二十五	十五
	二十一	二十六	十六
	二十二	二十七	十七
	二十三	二十八	十八
	二十四	二十九	十九
	二十五	三十	二十
	二十六	三十一	二十一
	二十七		二十二
	二十八		二十三
	二十九		二十四
	三十		二十五
	三十一		二十六

廣東作戦戦果敵の死傷二萬餘、我が戦死七十七 ○海軍機梁山空襲、敵十五機を撃墜  
岳州に突入  
南支方面最高指揮官更迭、安藤中將親補さる  
東莞占領  
陸軍機延安初空襲  
皇軍山西省討伐戦開始

廣東南方九江方面の掃蕩  
北支方面最高指揮官更迭杉山大將親補さる  
陸軍航空總監部新設、初代總監東條中將就任  
(メーメル選挙にドイツ派大勝)(十四年三月廿二日獨に復歸)  
山脇中將陸軍次官就任  
陸軍機昭平空襲  
汪精衛氏重慶を脱出す  
陸軍機神木、嵐縣空襲  
事變以來十一月末日迄の敵遺棄死體八十二萬三千餘、推算敵損害二百萬、占領面積百五十一萬五千六百九十六平方軒(我が全土の二倍強)に對し、我が戦死者四萬七千三百三十三名と大本營陸軍部發表 ○陸軍機重慶初空襲以後連爆 ○(フランコ軍バルセロナ入城)

昭 和		十 年	
月	日	月	日
九	三	十	五
八	二	九	四
七	一	八	三
六	二	七	二
五	一	六	一
四	二	五	二
三	一	四	一
二	二	三	二
一	一	二	一
	二	一	二
	三	二	三
	四	三	四
	五	四	五
	六	五	六
	七	六	七
	八	七	八
	九	八	九
	十	九	十
	十一	十	十一
	十二	十一	十二
	十三	十二	十三
	十四	十三	十四
	十五	十四	十五
	十六	十五	十六
	十七	十六	十七
	十八	十七	十八
	十九	十八	十九
	二十	十九	二十
	二十一	二十	二十一
	二十二	二十一	二十二
	二十三	二十二	二十三
	二十四	二十三	二十四
	二十五	二十四	二十五
	二十六	二十五	二十六
	二十七	二十六	二十七
	二十八	二十七	二十八
	二十九	二十八	二十九
	三十	二十九	三十
	三十一	三十	三十一

馬錫嶺占領  
新銳の大兵團塘沽へ上陸  
光州攻略  
陸軍機漢口空襲、敵十二機を撃墜  
海軍機昆明空襲、敵廿機を撃墜 ○同雲南初空襲  
田家鎮攻略 ○宇垣外相遂に辭職、近衛首相兼任親任式舉行さる

鄂漢線占領  
蕪湖占領  
臨口街占領  
(獨軍ブデーテン地區を完全占領と公表)  
京漢線遮断  
皇軍バイヤス灣北岸平海半島西岸に奇襲上陸 ○信陽攻略  
增城占領 ○蒙疆訪日團徳王一行到着  
大冶鐵山占領  
廣東に皇軍堂々と入城  
珠江通江作戦開始 ○南支作戦海軍部隊最高指揮官鹽澤幸一中將と發表  
陸海協力、虎門要塞攻略  
武漢三鎮完全攻略成る ○德安占領

帝國、武漢陥落後の不動の方針聲明  
大本營陸軍部、漢口作戦戦果發表—敵の死傷三十五萬餘、我が軍の犠牲六千五十三



年 四		年 四	
(紀元2599) 西曆1939		(紀元2599) 西曆1939	
月	四	月	四
二	三	八	八
三	六	七	四
四	七	六	三
五	八	五	二
六	九	四	一
七	十	三	〇
八	十一	二	九
九	十二	一	八
十	十三	〇	七
十一	十四	二	六
十二	十五	一	五
十三	十六	〇	四
十四	十七	九	三
十五	十八	八	二
十六	十九	七	一
十七	二十	六	〇
十八	二十一	五	九
十九	二十二	四	八
二十	二十三	三	七
二十一	二十四	二	六
二十二	二十五	一	五
二十三	二十六	〇	四
二十四	二十七	九	三
二十五	二十八	八	二
二十六	二十九	七	一
二十七	三十	六	〇
二十八	三十一	五	九
二十九	三十二	四	八
三十	三十三	三	七

海軍機宜昌連爆  
第三十四回陸軍記念日  
陸軍機西安空襲  
陸軍機平涼、西安猛爆 ○(チエツコ獨の保護國となる)  
皇軍修水渡河殲滅戰展開  
吳城占領  
南昌占領 ○國府重慶諸官廳分散を命令  
(フランコ軍マドリッド入城)  
武寧縣城占領  
新南群島臺灣總督府管下に入る旨公布

高安占領 ○北支軍安民布告を發す  
陸軍機西安空襲 ○高松宮殿下北支御視察より御歸京  
陸軍機東陽、隨縣を連爆  
陸軍機重慶、芷江空襲 ○小磯拓相、田邊遷相親任さる  
海軍機昆明空襲、敵四十一機撃破  
(アルバニヤ伊國治下に入る)  
海軍機雲南省蒙自初空襲  
敵の「四月攻勢」壊滅と中支軍發表  
敵の「四月攻勢」壊滅と北支軍發表  
陸軍機南鄭空襲敵十一機を撃破 ○汪精衛氏河内を出發

十 和 昭		十 和 昭	
三		二	
月	三	月	二
七	四	二	三
六	五	一	二
五	六	〇	一
四	七	九	〇
三	八	八	九
二	九	七	八
一	十	六	七
〇	十一	五	六
九	十二	四	五
八	十三	三	四
七	十四	二	三
六	十五	一	二
五	十六	〇	一
四	十七	九	〇
三	十八	八	九
二	十九	七	八
一	二十	六	七
〇	二十一	五	六
九	二十二	四	五
八	二十三	三	四
七	二十四	二	三
六	二十五	一	二
五	二十六	〇	一
四	二十七	九	〇
三	二十八	八	九
二	二十九	七	八
一	三十	六	七
〇	三十一	五	六
九	三十二	四	五
八	三十三	三	四
七	三十四	二	三
六	三十五	一	二
五	三十六	〇	一
四	三十七	九	〇
三	三十八	八	九
二	三十九	七	八
一	四十	六	七
〇	四十一	五	六
九	四十二	四	五
八	四十三	三	四
七	四十四	二	三
六	四十五	一	二
五	四十六	〇	一
四	四十七	九	〇
三	四十八	八	九
二	四十九	七	八
一	五十	六	七
〇	五十一	五	六
九	五十二	四	五
八	五十三	三	四
七	五十四	二	三
六	五十五	一	二
五	五十六	〇	一
四	五十七	九	〇
三	五十八	八	九
二	五十九	七	八
一	六十	六	七
〇	六十一	五	六
九	六十二	四	五
八	六十三	三	四
七	六十四	二	三
六	六十五	一	二
五	六十六	〇	一
四	六十七	九	〇
三	六十八	八	九
二	六十九	七	八
一	七十	六	七
〇	七十一	五	六
九	七十二	四	五
八	七十三	三	四
七	七十四	二	三
六	七十五	一	二
五	七十六	〇	一
四	七十七	九	〇
三	七十八	八	九
二	七十九	七	八
一	八十	六	七
〇	八十一	五	六
九	八十二	四	五
八	八十三	三	四
七	八十四	二	三
六	八十五	一	二
五	八十六	〇	一
四	八十七	九	〇
三	八十八	八	九
二	八十九	七	八
一	九十	六	七
〇	九十一	五	六
九	九十二	四	五
八	九十三	三	四
七	九十四	二	三
六	九十五	一	二
五	九十六	〇	一
四	九十七	九	〇
三	九十八	八	九
二	九十九	七	八
一	一百	六	七

中文方面最高指揮官更迭、山田中將親補 ○(一九三九年陸軍海軍大演習太平洋海上開始あり)  
平沼内閣成立  
陸軍機重慶空襲  
陸軍機五江空襲  
陸軍機第四次重慶空襲  
吳佩孚將軍全國に對して通告を發す

滿洲國西部疆域にソ聯兵越境續々  
皇軍海南島に奇襲上陸 ○南支海軍最高指揮官近藤信竹中將  
陸軍機蘭州第一次爆撃、敵十八機を撃破、地上機二十機を撃破  
陸軍機蘭州第二次爆撃、敵三十六機を撃破  
安陸作戦開始さる ○陸軍機第三次蘭州空襲敵五十六機を撃破  
海州作戦開始さる

海州占領 ○中支新政府下の敗殘兵匪團の歸順四萬五千に達す  
鎮南(安陸)占領  
鎮南南方に大規模演習展開 ○陸軍機延安、寧夏、嵐縣猛爆  
陸軍機涼州、西安空襲



五月					六月				
三十一日	二十九日	二十八日	二十七日	二十六日	二十五日	二十四日	二十三日	二十二日	二十一日

海軍機重慶空襲、敵十機を撃墜  
 「四月攻勢」反撃の結果、敵の遺棄死體二萬二千百九、我が戦死三百八十一と大本營陸軍部發表  
 陸軍機南鄭空襲 ○軍當局天津租界に對し強硬決意を表明  
 信陽、浙河一帶殲滅戰展開  
 外蒙軍ノモンハン方面で不法越境  
 黄河の治水工事は我が方の手で十四日完成した旨北支軍發表  
 事變以來四月末迄の戦果、敵の遺棄死體九十三萬六千三百四十五、我が戦死五萬九千九十八、敵に與へし損害二百三十萬(大本營陸軍部發表) ○ノモンハンで廿九日越境のソ聯機との空中戦に於いて四十二機を撃墜と關東軍發表  
 魯南地區の掃蕩戰開始 ○事變以來敵飛行機に與へし損害一千五百六十一機、わが損害百十六機、處分機雷數合計三千五百二(大本營海軍部發表) ○厦門に新銳部隊上陸

山西省柳林占領 ○鼓浪嶼問題の我方の最後の要求を手交  
 山東戰線動き蒙陰占領  
 魯南作戦成功し沂水攻略 ○莒縣占領  
 天津英佛租界の隔絶斷行  
 外蒙軍ハルハ河越境 ○秩父宮殿下滿北支御視察から御歸還  
 海・陸共同にて油頭敵前上陸  
 外蒙ソ聯機、甘珠爾湖附近に百五十機越境飛來、我が方十八機を以て敵四十九機を撃墜(關東軍發表)  
 陸軍隊舟山列島に敵前上陸し定海入城  
 外蒙機二百機とポイル湖上で空中戦、九十八機を確實に撃墜、爆撃機タムスクを空襲、三十機を爆碎(關東軍發表) ○潮州占領

七月						
二十九日	二十八日	二十七日	二十日	十九日	十八日	十七日

外蒙軍に對し總攻撃開始(ハルハ河地區)  
 山西省南部潞安地區に掃蕩戰開始  
 四日滿蒙國境戦場上空で敵五十三機を撃墜(關東軍發表) 地上部隊は敵戦車四百臺を鹵獲、或は擱坐炎上せしむ  
 事變以來七月五日迄の二年間に敵機撃墜六百七十二機、地上撃破百七十六機と大本營陸軍部發表(滿蒙國境を含む) ○ポイル湖上空で敵二十四機を撃墜 ○海軍機重慶連爆  
 支那事變二周年 ○油頭税關接收  
 沙縣占領 ○ノモンハン上空及甘珠爾湖上空で夫々敵二十七機、二十二機を撃墜  
 ポイル湖上空で敵二十九機を撃墜  
 滿蒙國境戦場上空で敵六十五機を撃墜 ○汪精衛氏蔣介石との絶縁聲明を發す  
 潞安占領 ○福建新作戦開始  
 日英會談東京に於て開催さる  
 山西省澤州城占領  
 ポイル湖上空で敵三十九機を撃墜(關東軍發表)  
 ノモンハン上空で敵四十四機を撃墜(關東軍發表)  
 ノモンハン上空で敵四十一機を撃墜(關東軍發表)  
 滿蒙國境戦場上空で五十九機を撃墜(關東軍發表)  
 米、突如日米通商航海條約廢棄を通告す  
 關東軍發表、滿蒙國境戦場上空に於ける確實なる敵機撃墜數七百十五機、敵遺棄死體四千以上 ○日英第五次會談、總濟問題で行き悩む







(紀元2600) 西曆1940		年 五 十	
月 五	月 四	月 三	月 二
三 八 十 九 二 十 二 十 一 日 日 日 日 日 日 日 日	九 十 五 二 十 三 二 十 五 二 十 八 日 日 日 日 日 日 日 日	八 十 二 十 八 十 三 日 日 日 日 日 日 日 日	
支那方面艦隊、黃浦江上流の開放を發表 聚陽陥落 (獨軍、オランダ、ベルギーに進入) (獨總統、白國歸屬、舊獨領の合併を布告) 漢水作戰の皇軍、白河を無血渡河 北支軍當局、不良外人の追放を聲明	(獨軍、丁抹、諾威に進入) 阿部特命全權大使出發 皇軍、洞庭湖に進軍開始 澤州占領 ○論功行賞第二十二回の發表 支那派遣軍總司令部(派遣軍將兵に告ぐ)と題する小冊子を全線の將士に配布す	中山縣城再度占領 第三十五回陸軍記念日 汪精衛氏、新中央政府樹立、宣言發表 西尾總司令官、軍管理工場返還に關し聲明 支那中央政治會議開催 國民政府南京遷都、新國民政府成立	

一一三

和 昭		(紀元2599) 西曆1930 年四十和昭	
月 二	月 一	月 二十	月 一 十
一 三 二 一 十 三 八 日 日 日 日 日 日 日 日	十 十 十 十 十 十 十 十 十 十 十 十 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日	十 十 十 十 十 十 十 十 十 十 十 十 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日	十 十 十 十 十 十 十 十 十 十 十 十 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日
オルドス地帯作戰の皇軍、烏鎮を占領 廣西省貴陽陥落 蒙古の雪原を掃蕩中の我軍は五原を占領 山東半島文登占領	海軍機、桂林空襲、敵二十三機を撃墜破 阿部内閣總辭職 米内内閣親任式 支那軍の冬季攻勢全面的に壊滅と南支軍發表 中支軍、浙東作戰を展開 (日米通商航海條約失効)	帝國政府、長江南京下流開放決定を關係各國に通告す 皇軍、佛印國境附近に新作戦展開、龍州、鎮南關占領 良口城占領 ○第七十五議會開院式、優渥なる勅語を賜はる 陸海軍機聯合、二十六日以来蘭州を三日間連爆	皇軍、安徽省鳳臺を占領 藤田中將、上海陸軍諸部隊指揮官に補さる 陸軍、農家出身下士官兵に米收納の休暇を許す 皇軍、廣西省北海沿岸欽州灣附近に奇襲上陸 南支派遣軍欽州城完全占領 抗日大據點たる南寧縣城を完全占領

一一二



月 九	月 八	月
四 二十三日	十一 二十五日	十二 二十三日
三 二十二日	十 二十四日	十一 二十二日
二 二十一日	九 二十三日	十 二十一日
一 二十日	八 二十二日	九 二十日
二 十九日	七 二十一日	八 十九日
三 十八日	六 二十日	七 十八日
四 十七日	五 十九日	六 十七日

上爆破三十、合計千九百三十四機、我が方の損害機數、事故五十七機、滿蒙國境百三十七機、合計百九十四機(以上六月下旬迄)

大本營海軍部、廣州灣へも授將禁絶監視員派遣方決定を發表

陸軍兵備體系改革、北、東、中、西部の四軍管區設定

支那方面艦隊司令長官、寧波、温州、三都澳、福州に授將路完封新作戦開始を宣言

米内内閣總辭職

海軍、鎮海を完全占領

第二次近衛内閣親任式

陸軍、胸章廢止實施

支那方面艦隊司令長官、中南支海港封鎖區域擴大を第三國に通告(十五日實施)

南支海軍、下川島完全占領

新體制第一回準備會開かれ、首相指導理念を聲明、新體制確立運動發足

日支交渉完結、共同聲明發表

北白川宮永久王殿下、蒙疆で御戰死

小林特派使節蘭印着 ○滿蒙貿易新協定新京で調印

海軍機、第三十五次重慶爆撃で敵二十七機を撃墜

陸軍、兵種兵科の區分撤廢と「兵長」の新設に関する法令公布

滿洲事變九周年

日佛兩國政府諒解の下に皇軍佛印へ進駐す

皇軍さらに海防より佛印へ進駐

日獨伊三國同盟ベルリンで調印、長くも詔書を換發あらせらる

七	月 六
七五 一日	十三 二十三日
日	十二 二十二日
日	十一 二十一日
日	十 二十日
日	九 十九日
日	八 十八日
日	七 十七日
日	六 十六日
日	五 十五日
日	四 十四日
日	三 十三日
日	二 十二日
日	一 十一日
日	日

佛印監視作戦の皇軍、龍州縣城を占領

南京で阿部大使、汪主席間に日支國交調整交渉開始

支那事變三周年記念日、事變以來の綜合戰果發表、敵遺棄死體百五十八萬七千六百但し敵の遺棄死體は私の目撃せるもののみで、然らざるものも計上する時は敵に與へた損害(死傷、逃亡、歸順等)總計少くも三百數十萬と判斷せらる、我が戰死八萬五千八百我が戰線延長約四千六百キロ、占據面積約百六十萬平方軒(我が全土の約二倍半弱)占據地以外の支那本土との比、約百分の五十一、支那全土との比、約百分の十六(以上六月中旬まで)敵機に與へた損害、撃墜三百九十六、地上爆破百六十八、滿蒙國境に於いてソ聯機に與へた損害、撃墜千三百四十四、地

皇軍宜城占領 (伊國、獨を支持參戰) ○日・タイ定期の第一便「松風」號出發

皇軍、宜昌占領

陸海軍機協力、重慶猛爆 ○日・タイ和親友好條約調印

(獨軍、パリ入城)

南支軍、佛印授將物資輸送路遮斷作戦開始

○(佛國、獨に降服)

我が方佛印の敵性に抗議

南支軍、香港北方に新作戦展開、寶安に上陸

大本營海軍部、佛印授將禁絶監視のため艦艇の一部と監視團を派遣する旨發表

英支國境方面の皇軍、龍崗墟を占領 ○佛印監視作戦の皇軍、寧明を占領

中支の皇軍、長江敵前渡河、宜昌對岸高地を占領 ○佛印監視作戦の皇軍、鎮南關を奪取



(紀元2601) 西曆1941)年六十和昭		(紀元2600) 西曆1940)年	
月	一	月	十
三十一日	八日	三十日	十二日
二十五日	六日	二十九日	十六日
二十三日	三日	二十八日	二十三日
八日	二日	二十四日	二十三日
六日	一日	二十三日	二十三日
三日		二十二日	二十三日
二日		二十一日	二十三日

勞澤使節、日蘭印第一回會談  
陸軍機、南陽、鄭州爆撃  
(米、ル大統領教書を發表、民主主義國徹底援助を強調す)  
東條陸相、陸軍訓令第一號を以て「戰陣訓」を示達  
海軍機、效果新橋を爆撃、ビルマ・ルート再び遮断さる  
河南の敵大砲滅戦展開さる  
タイ・佛印停戦協定成立

海軍機、詳雲で敵二十二機撃破  
臨時中央協力會議開催さる(三日間)  
支那方面艦隊司令長官、中南支沿岸の封鎖強化を中外に宣言  
大本營海軍部戦果公表―事變以來敵飛行機撃破千九百二十八機、我が損害百五十三機、處分せる敵機雷數五千六百十八、昭和十五年一年間の投擲量八千五百十九噸  
本多特命全權大使、汪主席に信任狀捧呈、日支外交茲に復歸す  
大本營陸軍部戦果公表―事變以來十一月下旬迄の敵遺棄死體百八十八萬八千三百五十(但しこの數字は私の目撃せるもののみで、然らざるものを計上する時は、敵に與へた損害(死傷、逃亡、歸順等)總計少くも三百五十萬と判断せらる)我が方の犠牲本年末迄十萬八千八百九十九名(張鼓峰ノモンハン兩事件を含む)敵機撃破數、事變五百八十八機、ノモンハン事件千三百八十九機、我が自爆數、事變六十機、ノモンハン事件百廿七機  
海軍機、成都、恩施を空襲、敵二十九機爆撃

五		十		和		昭	
月	一	十	月	十	月	十	月
九日	三十日	二十四日	十九日	十八日	十九日	十八日	十九日
九日	三十日	二十四日	十九日	十八日	十九日	十八日	十九日

藤田中將に代り、上海方面陸軍最高指揮官に澤田中將親補さる  
日華基本條約締結さる  
元老西園寺公望公薨去(十二月五日國葬)  
元老西園寺公望公薨去(十二月五日國葬)  
日華基本條約締結さる  
日華基本條約締結さる

第五回國勢調査 ○總力戰研究所開設さる  
閑院參謀總長宮殿下御退任、後任に杉山大將親補さる  
雷州半島に陸戰隊敵前上陸  
陸軍機、佛印河内飛行場に進駐  
大政翼賛會發會式舉行さる  
中支軍、敵第三戰區の中央兵團並に敵軍事施設の覆滅を續行すると共に東部兵團方面に作戦中と發表 ○英國、ビルマ・ルートを開閉○海軍機、再開初日のビルマ・ルートに猛爆  
安藤中將に代り、後宮中將南支方面最高指揮官に決定  
皇軍、作戦上の價值喪失のため南寧を撤退する旨南支派遣軍聲明 ○(伊・希兩國交戦状態に入る)







不許複製  
聖戰四年

昭和十六年六月廿七日印刷  
昭和十六年七月一日發行  
昭和十六年七月八日再發行

定價二十錢

編輯發行  
兼印刷人  
相馬基  
東京市麹町區有樂町一丁目十一番地

印刷所  
東京日日新聞社  
東京市麹町區有樂町一丁目十一番地

發行所  
東京日日新聞社  
東京市麹町區有樂町一丁目十一番地  
大阪毎日新聞社  
大阪市北區堂島上二丁目三十六番地

同

配給元  
東京市神田區段原町二丁目九番地  
日本出版配給株式會社

共同印刷株式會社

IMT 517

123

(紀元2601) 年六十和昭  
西曆1941

五月										四月	
月	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日
十九	十八	十五	十二	十一	十	九	八	七	六	三	一
日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日
<p>陸軍機、簡着初め雲南省各地を急襲、敵軍需補給源を覆滅す 新設の化兵監に町尻中將就任 陸軍機、第三次昆明爆撃</p> <p>皇軍、廣東省東岸甲子港に奇襲上陸 ○河北省一部の警備隊を治安軍と交代する 旨、北支軍當局發表</p> <p>燕湖南方に新作戦展開 ○目的を完了温州、海門より撤退す 日・佛印經濟協定調印成立 ○皇軍、湖北に新作戦展開 ○陸軍機鄭州、西安、 咸陽を猛爆 ○股家店占領(湖北作戦) ○(スターリン、首相に就任) 烟支那派遣軍總司令官、國際關係の好轉に頼らず作戦に邁進せんと決意を表明 皇軍、山西、河南省に大殲滅戦を展開 ○陸軍機昆明第四次猛爆 泰佛間平和條約東京で調印さる</p> <p>國防保安法案實施さる</p> <p>陸軍機、昆明、簡着猛爆</p> <p>南支に香爾ルート遮斷強化の新作戦展開、惠州に突入 ○中支三地區に新作戦 ○陸軍機、昆明を連爆 ○(ヘス獨副總統離國渡英す)</p> <p>皇軍、江北第二期作戦開始、棗陽を占領</p> <p>北支軍、中原序戦の經過並に戦果發表、敵の遺棄死體三萬四千 ○陸軍機、西安 渭南猛爆</p> <p>陸軍機洛陽連爆</p>										<p>二十六日 二十八日 二十九日</p>	

IMT 517

122



絶讃嵐の如き賣行！ 品切れのところ増版出来 特價五〇錢 送料六錢

# 解説 戦陣訓

戦陣訓の大文章は帝國軍人の守るべき大則を明示したものであるばかりでなく、一般國民の行ふべき大道を示した國民訓でもある。本社はこの戦陣訓に盛られた精神を國民一般に弘めたいと考へ、本訓編纂に關係を持たれた方々や、今事變に出征、身を以て戦陣訓を體得された陸軍將星の方々に乞ふて、各章毎に解説を願ひ之を整版編輯して刊行したものである。

解説執筆諸家 (イロハ順)

- |            |            |
|------------|------------|
| 文學博士 井上哲次郎 | 中陸軍中將 田中隆吉 |
| 中陸軍中將 今村均  | 中陸軍中將 桑木崇明 |
| 少佐 西原勝     | 大佐 馬淵逸雄    |
| 陸軍中將 岡村寧次  | 中陸軍中將 蒔田進  |
| 中陸軍中將 荻洲立兵 | 中陸軍中將 菊池寛  |
| 中陸軍中將 谷壽夫  | 中陸軍中將 末松茂治 |

東京九ノ内・振替東京二八〇〇番  
 東京日日新聞社  
 大阪堂島・振替大阪四〇五番  
 大阪毎日新聞社

## 文部省推薦 陸軍大將 吉田豊彦著 價一圓三十錢 送料十錢

# 機械化兵器讀本

高度國防國家の建設を目指してゐる我が國民が、機械化兵器を知らずにはゐることは恥辱である。即ち高度國防國家の根柢をなすものは機械化兵器の充實に他ならぬ。機械化國防協會々長たる著者の解説書。

## 陸軍省推薦 陸軍中佐 藤田實彦著 價九十錢 送料十錢

# 戦車戦記

戦の戦車隊長として赫々の武功を立て、武名を轟かせた藤田中佐の火戦を越えた實戦記録である。戦車隊の活躍如し、實戦をさながらに彷彿せしめる、書中到处ところより姿なき英雄の聲、殉忠の血潮が迸つてゐる。

帝國發明協會編

# 發明讀本

價一圓十五錢 送料十錢

我々の日常生活において、氣付かず居るが、如何に發明の恩澤を蒙つてゐるかは計り知れない。本書はこの發明の諸相を東西古今の例を引用し、百餘の挿圖と共に、平易な文章で、わかりやすく説いたもので、科學する心を叫ばれてゐる昨今誰しも知つておくべき事柄を懇切に説明してある。

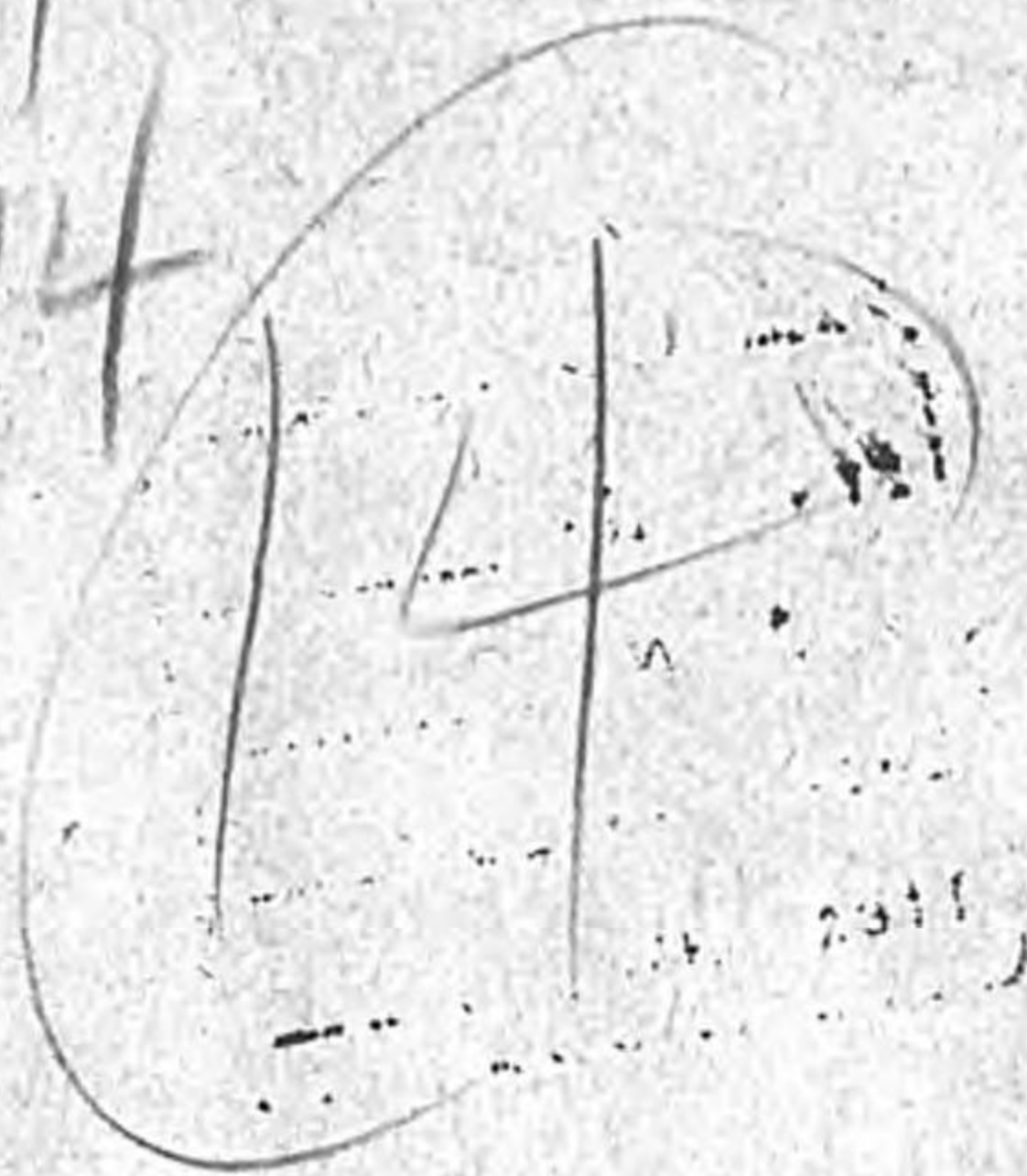
東京日日新聞社 東京二八〇〇番  
 大阪毎日新聞社 大阪四〇五番



SA 10083

Sack # 1

Item # 14



20¢



INTERNATIONAL PROSECUTION SECTION

Doc. No. 2930

3 February 1947

ANALYSIS OF DOCUMENTARY EVIDENCE

DESCRIPTION OF ATTACHED DOCUMENT

Title and Nature: Book Entitled "Four Years of Holy War"  
compiled by Information Bureau, War Ministry

Date: 1 July 1941 Original ( ) Copy (x) Language: Japanese

Has it been translated? Yes ( ) No (x)

Has it been photostated? Yes ( ) No (x)

LOCATION OF ORIGINAL

Document Division

SOURCE OF ORIGINAL: Japanese War Ministry

PERSONS IMPLICATED:

CRIMES TO WHICH DOCUMENT APPLICABLE: Preparation of  
Japanese Public Opinion for War

SUMMARY OF RELEVANT POINTS

This book is in the nature of a propaganda tract. The China Incident is reviewed and the real issue in China is said to be the expulsion of Britain and America from Asia. It is emphasized that the two national policy corporations, the North China Development Co. and Central China Promotion Co., are proceeding with the economic development of China. A supplement included in the book is called the "China Incident Development Diary", which traces the progress of the Incident from the outbreak of the MARCO POLO Bridge Incident (7 July 1937) to the intensive bombing of LOYANG by army planes (19 May 1941).

Analyst: E.T.GARDEN

Doc. No. 2930



2930

Proj no. —  
S. A. no. 10083  
Sack no. 1  
Item no. 14

Hajime ITO  
Room 363

-1-

Kind of Doc.: Printed Book, pp. 120

Title: Four years of Holy War

Sub-Title: Giant Steps towards the Construction  
of New East Asia.

Compiled by Information Department, War Ministry.  
Published by ŌSAKAINICHI Newspaper Office,  
and TŌKYŌNICHINICHI Newspaper Office.

Date: 1 July, 1941

### Contents

1. Rushing Onwards for Four years!
2. The Incident and Increment of National Strength.
3. International Situation Centering round the Incident.
4. Essential Characteristics of the Incident.
5. Construction of Defence State Setup.
6. Conclusion

### Supplement

7. China Incident Development Diary.

1. Rushing onwards for four years! We have won every battle, and CHIANG Kai-shek's armies are now driven to the last ditch, but we



must  
evaluate the "construction phase" of the Incident higher than the  
"destruction phase."

The birth of the NANKING Regime is one of the most significant  
fruit of the Incident. Further, two national policy corporations,  
NORTH CHINA Development Co. & CENTRAL CHINA Promotion Co., are  
steadily proceeding with the economic development of CHINA.

2. We are short of goods, but we must endure the shortage in order  
to bring about the revolutionary increment of national strength in  
a dozen years. That is the way for us to meet the international  
crisis.
3. JAPAN-CHINA Fundamental Treaty is a big step towards the  
expulsion of tyrannical AMERICA and BRITAIN from ASIA. So,  
it is very natural that AMERICA is very hostile to JAPAN.
4. Superficially we are fighting with the CHIANG Kai-Shek Regime,  
but in reality we are fighting with BRITAIN & AMERICA, that are backing  
up CHIAN. Kai-shek with military supplies and credits.
5. In order to meet this situation, we must replete our national strength,  
so that we may forge ahead towards our ideal of the creation of  
NEW ORDER of EAST ASIA, defying the maneuvers of hostile Powers.
6. The Emperor was pleased to say on the first anniversary of CHINA

INCIDENT :



Unless deep-rooted evils are eradicated now, stability of EAST ASIA can never be expected.

We must set the August Mind at rest by establishing the EAST ASIA Co-Prosperity Setup.

7. CHINA Incident's Development Diary: Outbreak of MARCO POLO Bridge Incident (7 July, 1937) — Intensive bombing of LOYANG by army planes (19 May, 1941)